

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第243集

藤井寺市

川 北 遺 跡

バイパス送水管(藤井寺～長吉)整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

藤井寺市

川 北 遺 跡

バイパス送水管(藤井寺～長吉)整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書は、当センターが藤井寺市川北1丁目目で平成25年度に実施したバイパス送水管（藤井寺～長古）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

川北遺跡の所在する藤井寺市は、大和川や石川が流れ、古来より長尾街道（大津道）や竹内街道（丹比道）の交わる水陸双方からの交通の要衝として古代から発展してきました。遺跡の南方には、百基以上の大小様々な古墳が築かれている古市古墳群が立地しています。また、東・南側には、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である船橋遺跡が隣接しています。

調査地は、現大和川の北側に位置し、宝永元年（1704）に大和川が現在の位置に付け替えられて以降、水田として活用されてきました。今回の調査では、古代から中世にかけての砂礫の堆積層および流路を検出し、それらの上・下層から古代の水田を3面検出することができ、当時の環境を考える上でも重要な成果となりました。

また、砂礫層の中からは、大量の遺物が出土しました。弥生時代から古代にかけての土器とともに、瓦や土馬・製塩土器などがあり、銭貨や馬の歯なども出土しました。

さらに、特筆すべきものとして、大量の弥生時代中期のサヌカイト製の石器や剥片が出土しています。

これらの遺物は、さほど遠くない上流の遺跡を浸食して洗い出されてきたものと考えられます。よって、当調査地の大量の砂礫層は、旧大和川の古代の流れの一部と捉えることができます。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所、大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会など関係諸機関の方々のご指導、ご協力を賜りました。この場を借りて厚く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業により一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成25年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田 邊 征 夫

例 言

1. 本書は、大阪府藤井寺市川北1丁目地内に所在する川北遺跡13-1調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査はバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴い、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。
[発掘調査]
受託契約名 バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う川北遺跡発掘調査委託
受託契約期間 平成25年4月1日～平成25年12月27日
現地調査期間 平成25年4月8日～平成25年6月28日
整理期間 平成25年7月1日～平成25年9月30日
調査体制 事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史 調査課長 岡戸哲紀
調査第二課長補佐 市本芳三 主査 森屋美佐子 専門調査員 片山彰一
4. 本書で用いた現場写真は森屋が撮影し、遺物写真については、片山が担当した。
5. 調査に際しては、大阪府教育委員会、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所のご指導・ご協力を得た。
なお、馬の歯に関しては、大阪府教育委員会の宮崎泰史氏にご教示いただいた。
6. 本書の作成および執筆、編集は森屋が行った。
7. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）の数値を用いた。
2. 座標は、世界測地系を使用し、平面直角座標系第Ⅵ座標系に準拠する。座標単位は全てmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は $6^{\circ}47'18''$ 西へ、真北は $0^{\circ}12'42''$ 東へそれぞれ偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を200分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。
また、遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とし、石製品および石器、土鍾は3分の2、銭貨は等倍とした。
なお、打製石器の欠損部にアミカケを施した。その他、漆附着範囲をアミカケを付して示している。
さらに、写真図版の遺物において、土器などは任意の倍率、石器および石製品は約3分の2、馬歯はほぼ等倍である。
8. 遺物実測図中の各遺物に付与した番号は、写真図版とも一致する。
なお、写真図版のみの掲載遺物に関しては、493から掲載順に付与している。
9. 古代の遺物に関しては、以下の文献を参考にした。
小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究
—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀』（有）京都編集工房

目 次

序 例 凡 目	文 言 例 次	
第1章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査・整理作業の経緯と経過	1
第2章	位置と環境	3
第1節	遺跡の位置と地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3節	既往の調査	5
第3章	調査の方法	6
第1節	現地調査	6
第2節	整理作業	6
第4章	調査成果	8
第1節	基本層序	8
第2節	検出遺構と遺物	12
第5章	総括	49
	写真図版	
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	調査区位置図	第21図	第6層 出土土器(6)
第2図	調査区配置図	第22図	第6層 出土土器(7)
第3図	周辺の地形環境図	第23図	第6層 出土土器(8)
第4図	周辺の遺跡分布図	第24図	第6層 出土土器(9)
第5図	地区剖面	第25図	第6層 出土土器(10)
第6図	東西断面模式図	第26図	第6層 出土土器(11)
第7図	南北断面および下層確認トレンチ断面図	第27図	第6層 出土土器(12)
第8図	第3層 出土土器	第28図	第6層 出土瓦
第9図	第2面 全体平面図	第29図	第6層 出土製塩土器・銭貨・土製品
第10図	第2面 1・2流路 断面図	第30図	第6層 出土埴輪
第11図	第3面 全体平面図	第31図	第6層 出土石器(1)
第12図	第3面 3流路 出土土器	第32図	第6層 出土石器(2)
第13図	第3面 4畦畔 断面図	第33図	第6層 出土石器(3)
第14図	第4面 全体平面図	第34図	第6層 出土石器(4)
第15図	第3面 5畦畔・第4面6畦畔 断面図	第35図	第6層 出土石器(5)
第16図	第6層 出土土器(1)	第36図	第6層 出土石器(6)
第17図	第6層 出土土器(2)	第37図	第6層 出土石器(7)
第18図	第6層 出土土器(3)	第38図	第5面 全体平面図
第19図	第6層 出土土器(4)	第39図	第5面 7畦畔 断面図
第20図	第6層 出土土器(5)	第40図	古代河川流路想定図

写真図版目次

図版1	遺構(1)	図版3	遺構(3)
1.	中央南北断面	1.	第3面 3流路 検出状況
2.	第2面 1・2流路 検出状況	2.	第3面 3流路肩部 粘土ブロック 検出状況
3.	中央東西断面	3.	第3面 3流路 西側肩部断面
図版2	遺構(2)	図版4	遺構(4)
1.	第3面 全景	1.	第4面 全景
2.	第3面 4・5畦畔 検出状況	2.	第4面 6畦畔 検出状況

- 図版5 遺構(5)
1. 第6層 上層東西断面(1)
 2. 第6層 上層東西断面(2)
 3. 下層確認トレンチ断面
 4. 第5面 7畦畔 検出状況
 5. 第5面 7畦畔 断面
- 図版6 遺物(1)
1. 第3層 出土土器
 2. 第3面 3流路 出土土器(1)
- 図版7 遺物(2)
1. 第3面 3流路 出土土器(2)
 2. 第6層 出土土器(1)
 3. 第6層 出土土器(2)
- 図版8 遺物(3)
1. 第6層 出土土器(3)
 2. 第6層 出土土器(4)
- 図版9 遺物(4)
1. 第6層 出土土器(5)
 2. 第6層 出土土器(6)
- 図版10 遺物(5)
1. 第6層 出土土器(7)
- 図版11 遺物(6)
1. 第6層 出土土器(8)
- 図版12 遺物(7)
1. 第6層 出土土器(9)
- 図版13 遺物(8)
1. 第6層 出土土器(10)
 2. 第6層 出土土器(11)
- 図版14 遺物(9)
1. 第6層 出土土器(12)
- 図版15 遺物(10)
1. 第6層 出土土器(13)
- 図版16 遺物(11)
1. 第6層 出土土器(14)
- 図版17 遺物(12)
1. 第6層 出土土器(15)
- 図版18 遺物(13)
1. 第6層 出土土器(16)
- 図版19 遺物(14)
1. 第6層 出土土器(17)
- 図版20 遺物(15)
1. 第6層 出土土器(18)
- 図版21 遺物(16)
1. 第6層 出土土器(19)
- 図版22 遺物(17)
1. 第6層 出土土器(20)
- 図版23 遺物(18)
1. 第6層 出土土器(21)
- 図版24 遺物(19)
1. 第6層 出土土器(22)
- 図版25 遺物(20)
1. 第6層 出土土器(23)
- 図版26 遺物(21)
1. 第6層 出土土器(24)
- 図版27 遺物(22)
1. 第6層 出土土器(25)
- 図版28 遺物(23)
1. 第6層 出土土器(26)
- 図版29 遺物(24)
1. 第6層 出土土器(27)
- 図版30 遺物(25)
1. 第6層 出土銭貨・瓦
- 図版31 遺物(26)
1. 第6層 出土土製品
- 図版32 遺物(27)
1. 第6層 出土製塩土器
 2. 第6層 出土形象埴輪
- 図版33 遺物(28)
1. 第6層 出土円筒埴輪
- 図版34 遺物(29)
1. 第6層 出土桃の種子
 2. 第6層 出土馬歯
- 図版35 遺物(30)
1. 第6層 出土砥石
 2. 第6層 出土石器(1)

図版36 遺物(31)

1. 第6層 出土石器(2)

図版37 遺物(32)

1. 第6層 出土石器(3)

図版38 遺物(33)

1. 第6層 出土石器(4)

図版39 遺物(34)

1. 第6層 出土石器(5)

図版40 遺物(35)

1. 第6層 出土石器(6)

図版41 遺物(36)

1. 第6層 出土石器(7)

図版42 遺物(37)

1. 第6層 出土石器(8)

表 目 次

第1表 出土馬歯一覧表

第2表 出土石器一覧表(1)

第3表 出土石器一覧表(2)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

川北遺跡は、大和川と石川の合流地点の北北西側の藤井寺市に所在する、弥生時代中期から古墳時代前期初頭の遺跡である(第1図)。宝永元年(1704)に現在の川筋に付け替えられた人工河川である現大和川の北側に位置し、東端および南側は船橋遺跡に、北東側に本郷遺跡と隣接する。

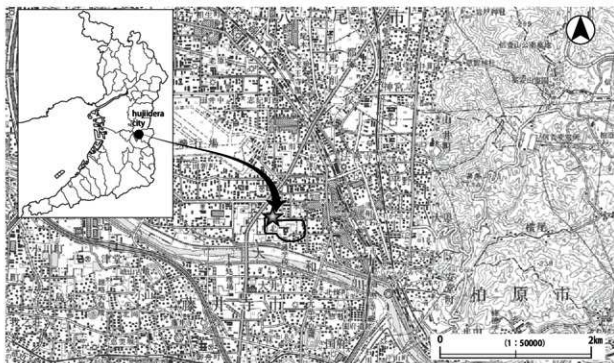
遺跡発見の経緯は、大阪府立藤井寺養護学校(現大阪府立藤井寺支援学校)建設による。本校舎の建設に伴い、大阪府教育委員会が昭和55年(1980)2月27日から3月5日にかけて試掘調査を行ったところ、用地内の一部で布留期の遺構・遺物が検出されたことを受け、本調査が同年4月21日から7月18日にかけて実施された。

その結果、弥生時代中期の土器群や後期の方形周溝墓・壺棺等、古墳時代の竪穴住居・井戸などが検出されている。

今回の調査は、大阪広域水道企業団東部水道事業所が進めているバイパス送水管(藤井寺～長古)整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。これに先駆けて、平成24年度に大阪府教育委員会が藤井寺ポンプ場内の2か所で試掘調査を行ったところ、古墳時代から古代にかけての遺物が検出されたことから、遺跡範囲が西側に拡張され、公益財団法人大阪府文化財センターが本調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査・整理事業の経緯と経過

調査地は、藤井寺ポンプ場内の北東端部に位置する。直径22mの円形で面積は380㎡である。平成25年(2013)4月8日から機械掘削を開始し、4月16日から人力掘削による遺構面の調査に着手し、同

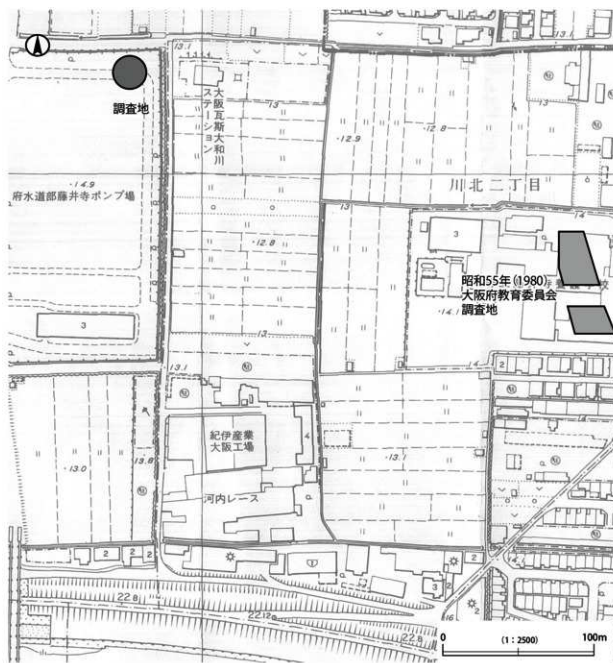


第1図 調査区位置図

年6月28日に調査を終了した。

調査は、調査区域内の遺構面の存否を確認すべく、鋼矢板を打設して地表下3.6mまで人力による掘削を実施し、遺構面の確認に努めた。その結果、地表下1.6m以下に古代から中世にかけての地層があることを確認した。これらの地層は、掘削深度の3.6m以下におよぶ可能性がでてきたため、下層確認のトレンチを一部に設定し、さらに、その部分を約1.5m掘削し、遺構面の確認を行った。

以上の調査では、コンテナパッドに換算して72箱におよぶ遺物が出土し、調査が終了した翌月の7月から9月末までに、南部調査事務所において、報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を行った。本事業では、現地で作成した図面のトレース、遺物の抽出・接合並びに実測、各種台帳の作成・整備を実施し、遺物挿図のトレース・版下作成、遺物の写真撮影と遺構・遺物の写真図版作成、遺物の収納、報告書原稿の執筆をそれぞれ実施し、本報告書の刊行をもって総てを終了した。



第2図 調査区配置図

第2章 位置と環境

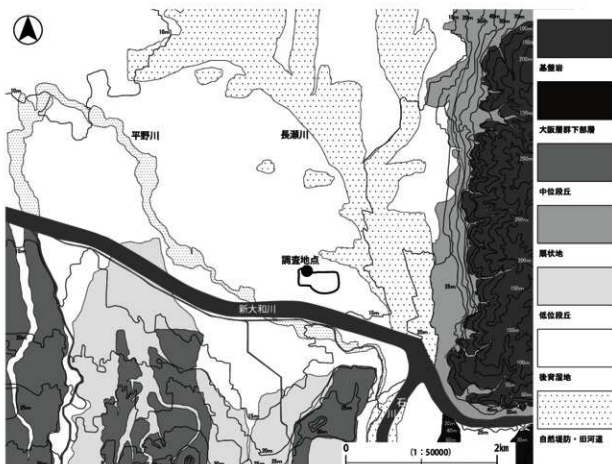
第1節 遺跡の位置と地理的環境

川北遺跡は、藤井寺市の北端部に位置する川北1丁目・2丁目に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は、南北約300m、東西約500mにおよび、今回の調査地は、大和川が西流する約300m北側の大阪広域水道企業団の藤井寺ポンプ場の北東部に位置している。

本遺跡周辺の地形環境は、大きくは沖積平野に分類される。巨視的にみると、調査地の東側には生駒山西麓の扇状地が展開し、南側には羽曳野丘陵、河内台地が広がっている。さらに、北側には石川と合流したのち、北西に向かって流れていた旧大和川水系の中小河川によって形成された沖積低地が展開している。今回の調査地は、河内平野南部の羽曳野丘陵・台地の北方約1.4kmの沖積低地上に立地し、現状では後に形成された沖積層に覆われている。

調査地の標高は、現地表面でT.P.+143mを測り、ほぼ水平であるが、ポンプ場造成時点で1.6mの盛土がなされていることから、本来の地表面はT.P.+127m前後の水田面である。

なお、下層確認の調査を行った際に検出した古代の水田面の標高は、T.P.+104m前後であることから、2m強の堆積層が存在していたことになる。



第3図 周辺の地形環境図 (例)所2002を元に遺跡範囲および調査区を追記)

第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する河内平野南部には、多数の遺跡が点在し、かつそれらの考古学的な調査成果については重要なものが数多く存在している。本節では、川北遺跡に近接する遺跡の動向を概観しておく。

【船橋遺跡】 大和川と石川が合流する西側の現大和川を挟んで南北に拡がる大規模な遺跡で、北西部で川北遺跡に隣接している。縄文時代から近世までの複合遺跡で、1948年に現大和川の川床で遺跡が発見されたのを端緒に数次にわたり調査が行われている。河内橋の周辺では、縄文時代晩期後葉の遺物包含層が広範囲に拡がっており、集落の可能性を窺わせる。弥生時代前期から中期にかけては、左岸側で水田の拡がりや中期の墓域が確認されている。さらに、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構・遺物については、右・左岸を問わず遺跡内の各地点で検出され、大規模な集落が存在していることが判明した。また、右岸側では、飛鳥時代から奈良時代にかけて、左岸側では古代末から中世前期にかけての遺構面の拡がりも確認でき、時期毎の中心域が移動していることが推定された。

【本郷遺跡】 船橋遺跡の北側および川北遺跡の北東側に隣接する、現大和川を挟んで、氾濫原および自然堤防上に立地する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。

調査では、弥生時代後期後半の溝から小銅鐸が出土している。

また、古墳時代前期の庄内期後半から布留期前半にかけての井戸や庄内期中頃から後半にかけての方形周溝墓が検出されている。

【西大井遺跡】 当遺跡の南西側に位置し、国府台地と羽曳野丘陵先端の中位段丘に挟まれた谷底平野の谷口付近に立地する旧石器時代から近世の複合遺跡である。数次にわたる調査で、弥生時代後期後



第4図 周辺の遺跡分布図

半から古墳時代前期庄内期にかけての土坑が4000基以上検出されている。

さらに、その上層から古墳時代前期の水田や溝が検出されている。他に、同時期の方形周溝墓・竪穴住居・井戸などの検出を見る。

【国府遺跡】 船橋遺跡の南側に隣接し、国府台地の北東部に立地する旧石器時代から中世の複合遺跡である。明治年間にすでにその存在が知られ、大正年間には縄文時代前・晩期の埋葬人骨群が多数確認されたことにより、全国的に知られるようになった。

また、旧石器時代後期の国府型ナイフ形石器の標識遺跡としても著名である。弥生時代については、後期末の溝が1条検出されたのみで詳細は明らかではない。

なお、平安時代末から鎌倉時代初頭の建物群周辺の礫群中から巴形銅器が出土している。

第3節 既往の調査

川北遺跡は、昭和55年（1980）に藤井寺養護学校（現藤井寺支援学校）の本校舎の建設計画が持ち上がり、旧石器時代から歴史時代におよぶ周知の船橋遺跡の約200m北という近接地にあることから、埋蔵文化財の存在が予想されたため、大阪府教育委員会文化財保護課が同年2月27日から3月5日にかけて試掘調査を実施された。その結果、用地内の一部で古墳時代前期布留期の遺構・遺物が検出されたことから、同年4月21日から7月18日までの期間、本調査が行われた。

本調査は、試掘調査の結果から、用地内のやや西寄りで南南東から北北西方向の溝が存在することが予想されたために、その推定位置を中心に幅約20mの調査区を設定し、そのうちの校舎にかかる約1400㎡について調査が実施された。調査区は校舎の配置に伴って2区に分けられた（第2図）。

調査は、古墳時代前期の遺構面までの地表下約1mを機械掘削し、青灰色シルト層上面で遺構を検出している。遺構面は、南端でT.P.+126mであり、北へわずかに傾斜し、北端ではT.P.+124mを測る。弥生時代後期の方形周溝墓および壺棺墓を各1基、古墳時代前期初頭の竪穴住居3棟、井戸2基、土坑・ピットなどが検出されている。さらに、下層確認のための調査では、暗青灰色シルト上面で、弥生時代中期の土器群と後期の溝を検出している。

弥生時代中期の土器群は、第Ⅲ様式の完形もしくは完形に近いものが15点中12個体あり、その中でも9点が生駒西麓産のものである。ほとんどのものが穿孔されていることや出土状況で一定の間隔を保ち正立に近いものが多くあることなどから、方形周溝墓の周溝出土とも考えられる。

弥生時代後期の方形周溝墓および壺棺墓、溝等から出土した土器は、出土量が少なく全容は不明であるが、後期前半に属すると考えられる。

古墳時代前期の竪穴住居、井戸、溝、土坑から出土した土器は、井戸の1基が庄内期の新しい段階でそれ以外は、布留期の後半に属すると考えられる。

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

発掘調査の実施に当たっては、基本的に『朝大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』2010に従った。

地区割りの方法については、基本的に基準線として国土座標軸（世界測地系）を使用し、第Ⅰ区画から第Ⅳ区画までを用いた。

調査個所の呼称については、受託年度（西暦下2桁）－発注番号（発注順）を組み合わせで標記する原則に基づき、13-1調査区と呼称している（本文中では、今回は1か所のみでの調査のため割愛している）。

調査区の地区割りについては国土座標を利用し、第Ⅵ座標系に基づく地区割りによっている（第5図）。なお、今回の座標系は、世界測地系に則っている。これに準じると今回の調査地の第Ⅰ・Ⅱ区画上の位置はF 6-15となる。遺物の取り上げもこの世界測地系に即しており、取り上げ区画には最小単位を10mとする第Ⅳ区画までを用いた。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海面（T.P.：TOKYO PEIL）を用いた。

盛土および現代耕作土を機械掘削で除去後、以下順次、人力掘削を行った。

検出遺構の測量に関しては、各遺構面の平面図を基本的に縮尺100分の1の平板測量により作成し、個別の遺構図は遺構に応じた縮尺を設定し、平面図および断面図を作成した。調査区の層序を観察するために、当初、調査区の中央を通るラインで東西および南北方向に畦を2本設定したが、中世の流路を検出した段階で、流路に直交する南西－北東方向で地層断面の観察を行い、合わせて縮尺20分の1の断面図を作成した。

なお、各遺構面および全体断面や各遺構の検出状況・断面などを、35mmカメラ・6×7カメラ・台帳登録用デジタルカメラで、適宜、撮影を行った。

なお、現地での調査とともに、出土した遺物の洗浄・注記・遺物登録台帳作成を行った。

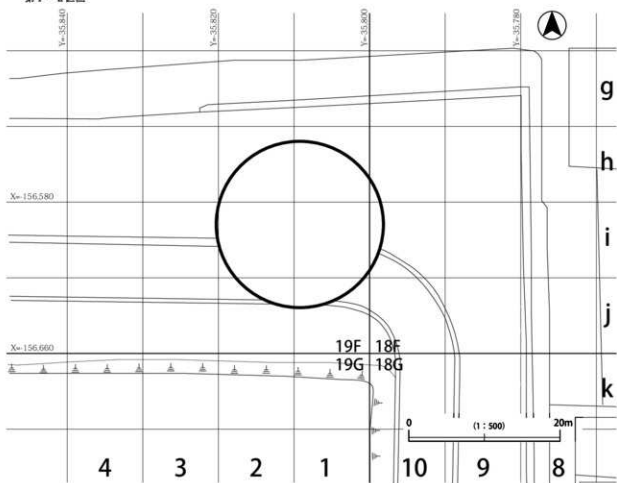
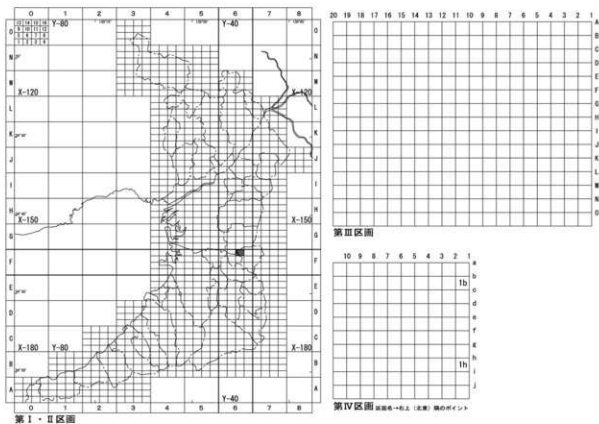
第2節 整理作業

発掘調査で出土した遺物は、土器・土製品・石器などを合わせるとコンテナパッドに換算して72箱になる。この中から重要と判断されるものについて約500点を抽出し、497点を実測した。また、これらの作業に並行して、報告書刊行後の遺物管理を行うため、FileMaker社のFileMakerPro 8.0を用いて遺物データベース（ピック・アップ台帳）を作成した上で収納を行った。

なお、報告書掲載の挿図類は、遺構図・遺物図ともにAdobe社のWindows版PhotoshopCS2を用いて図面の合成・調整を行い、同社のIllustrator CS2を用いてトレース作業を行う手順によって作成している。

写真図版に関しては、フィルムをスキャナーを用いてデジタルデータ化し、Adobe社のInDesign CS5.5を用いて写真図版の作成・編集を行った。

なお、報告書作成および編集は、Adobe社のInDesignCS5.5を用いて作業を行った。



第4章 調査成果

第1節 基本層序

本調査区の基本層序は、概ね7層に大別される。以下に詳細を記す。なお、第6図は第3面上層断面図と下層断面図を合成した模式図である。

第1層：盛土

第2層：現代作土層

第3層：中～近世作土層

第4層：中世洪水堆積層

第5層：古代作土層

第6層：古代洪水堆積層

第7層：古代作土層

第1層は、現代の耕作以降の盛土層で約1.6m堆積していた（地表面T.P.+14.3m）。

第2層は、現代耕作土層で、ほぼ水平に約0.2m堆積していた。

第3層は、細砂～中礫混じりの粘土層が主で、約0.2～0.3mの厚みがあり、南に行くに従い層厚を増す。大きくは3層に区分できる。

第3-1層は、灰オリーブ色の細砂～中礫混じりの粘土層で、約0.15mの厚みをもつ。南北方向にはほぼ水平に堆積するが、西に向かって厚みを増している。

第3-2層は、オリーブ黒色の細礫～中礫が混じる粘土層で、0.1～0.4mの厚みをもち、北端部で切れる。南半分で層厚が増す。

第3-3層は、暗オリーブ灰色の細礫～中礫を含む粘土層ないしは灰オリーブ色の細砂～中砂が混じる粘土層で、約0.1～0.2mを測り、西北部の1/4弱で検出している。

遺物は、陶磁器・中世の瓦器片や土師器片がわずかに出土している。

第4層は、洪水堆積の砂礫層が主で、大きく3層に区分される。

第4-1層は、トレンチ西端部の一部で検出されたオリーブ黒色ないしは灰色の粘土層で、厚みが約0.1～0.4mを測り、西側に向け層厚を増す。

第4-2層は、西端部を除き全面に堆積しており、約0.3mを測る細砂から中砂および淡褐色の砂礫層である。中心部に向けて層厚を減じる。上方細粒化している。

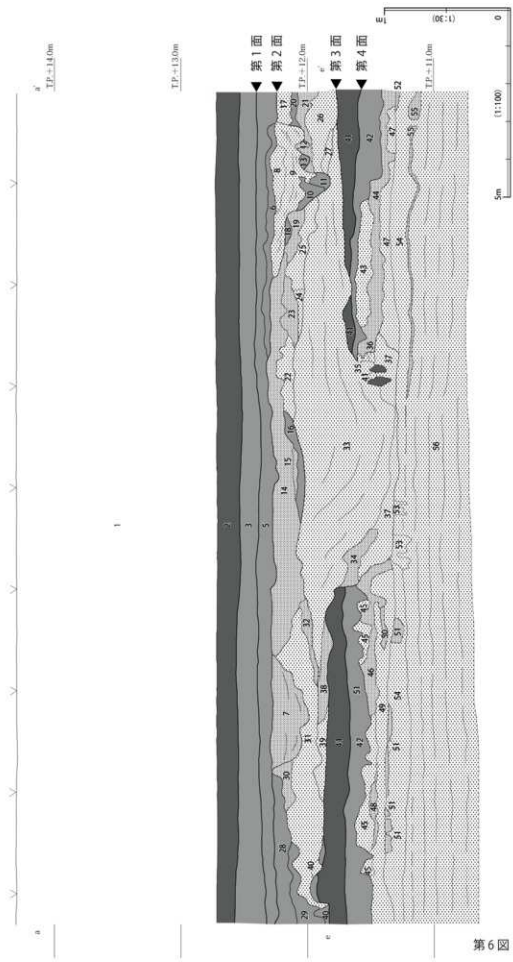
第4-3層は、主に、3流路の堆積層で、南南東から北北西に向けて蛇行し、中心部が盛り上がり両側に溢れ出している。

遺物は、瓦器や黒色土器、土師器・須恵器および瓦が出土しており、サヌカイトの剥片および不定形刃器なども出土している。

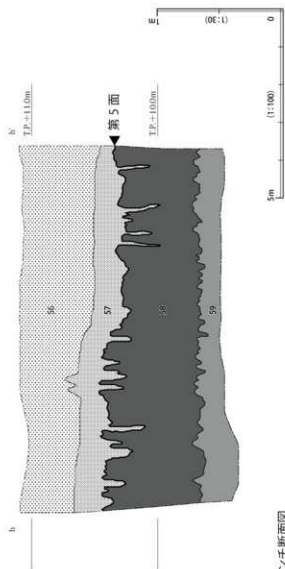
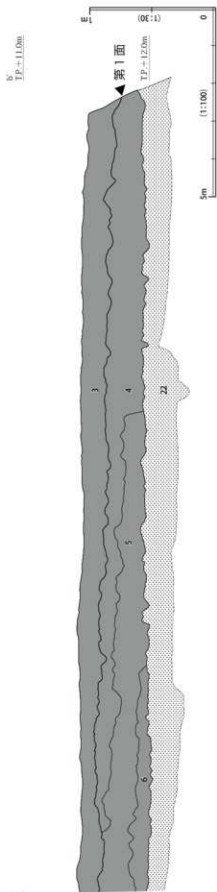
第5層は、主に粘土層で2層に区分できる。

上層に土壌化した暗灰色の粘土が0.1～0.2m堆積しており、下層に土壌化が弱い暗オリーブ灰色の粘土が0.1～0.2m堆積している。東半部では、西側が薄く東方向に層厚を増す。

遺物は、黒色土器や土師器・須恵器などの小片がわずかに出土している。



第6图 東西断面模式图



第7図 南北断面および下層確認トレンチ断面図

第6・7図 断面土層 土色・土質

1.	盛土									[第1層]
2.	現代耕作土									[第2層]
3.	7.5Y4/2	灰オリーブ	粘土	細砂~中礫含む						[第3-1層]
4.	2.5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土	細砂~中礫混じる						[第3-2層]
5.	10Y3/2	オリーブ黒	粘土	細礫~中礫混じる						[第3-3層]
6.	7.5Y4/2	灰オリーブ	粘土	細砂~中砂混じる						[第4-1層]
7.	10Y3/2	オリーブ黒	極細砂	中礫含む						
8.	7.5Y4/2	灰オリーブ	細礫	中礫含む						
9.	5GY4/1	暗オリーブ灰	粗砂	中礫混じる						
10.	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	粘土							
11.	2.5Y4/1	黄灰	粘土	細砂混じる 中礫含む						
12.	2.5Y6/3	にぶい黄	極細砂~細礫							
13.	10Y4/1	灰	粘土	細礫混じる						
14.	5GY4/1	暗オリーブ灰	細砂~中砂	中礫混じる 7.5GY2/1						
15.	10G4/1	暗緑灰	中砂							[第4-1層]
16.	5B4/1	暗青灰	粘土	中砂混じる 大礫含む						[第4-1層]
17.	5GY4/1	暗オリーブ灰	粗砂	細礫~中礫混じる						[第4-2層]
18.	10GY4/1	暗緑灰	粘土	細砂混じる						[第4-2層]
19.	7.5GY4/1	暗緑灰	細砂~中砂							[第4-2層]
20.	5G4/1	暗緑灰	粘土							[第4-2層]
21.	7.5Y5/2	灰オリーブ	細砂~中砂							[第4-2層]
22.	5B5/1	青灰	中礫~大礫							[第4-2層]
23.	5GY4/1	暗オリーブ灰	粗砂	細礫~中礫混じる						[第4-2層]
24.	10Y5/1	灰	細礫	中礫含む						[第4-2層]
25.	7.5Y5/2	灰オリーブ	細礫~中礫							[第4-2層]
26.	10YR6/4	にぶい黄橙	細砂~中礫	大礫混じる						[第4-2層]
27.	5Y6/2	灰オリーブ	細礫~中礫							[第4-1層]
28.	10Y3/2	オリーブ黒	粘土	細砂~中礫含む						[第4-1層]
29.	10Y6/1	灰	粘土	中礫混じる						[第4-1層]
30.	5Y4/3	暗オリーブ	細砂~中砂	中礫含む						[第4-2層]
31.	2.5Y5/4	黄褐	中砂~中礫							[第4-2層]
32.	2.5GY4/1	暗オリーブ灰	細砂~中砂							
33.	2.5Y7/3	浅黄	細砂~中礫	大礫含む						
34.	10Y3/1	オリーブ黒	細砂	植物遺体ラミナ状に含む						
35.	7.5Y5/2	灰オリーブ	細礫~中礫							
36.	10Y5/2	オリーブ灰	中砂~細礫							
37.	10Y5/1	灰	細礫~中礫							
38.	5Y4/1	灰	極細砂							
39.	10YR6/6	明黄褐	細礫~中礫							
40.	10Y4/1	灰	粘土	細砂混じり						[第5-1層]
41.	7.5Y4/1	灰	粘土	細砂混じり						[第5-1層]
42.	5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土	細砂混じり						[第5-2層]
43.	7.5Y6/3	オリーブ黄	細砂~中礫							[第6層]
44.	5GY5/1	オリーブ灰	極細砂~細砂							[第6層]
45.	5Y5/1	灰	細砂~中礫							[第6層]
46.	5GY4/1	暗オリーブ灰	極細砂~細砂							[第6層]
47.	10Y4/1	灰	細砂~中礫							[第6層]
48.	10GY4/1	暗緑灰	極細砂~細砂							[第6層]
49.	7.5Y5/2	灰オリーブ	細礫~中礫							[第6層]
50.	10GY4/1	暗緑灰	極細砂~細砂							[第6層]
51.	10Y5/1	灰	極細砂~中砂							[第6層]
52.	10Y4/1	灰	細砂~中砂							[第6層]
53.	5Y5/1	灰	細砂~中礫							[第6層]
54.	2.5Y7/2	灰黄	細砂~中礫							[第6層]
55.	10Y5/1	灰	極細砂~中砂							[第6層]
56.	10Y6/1	灰	中砂~中礫 大礫混じる ラミナあり							[第6層]
57.	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	極細砂							[第7-1層]
58.	7.5Y4/1	灰	粘土 10YR7/6 明黄褐 粘土ブロック混じる							[第7-2層]
59.	5Y4/1	灰	粘土 10Y3/1 オリーブ黒 粘土ブロック混じる							[第7-3層]

第6層は、調査区全域に拡がり、部分的に薄い細砂層を挟む浅黄色の砂礫層である。層厚は1.2～1.4mで、東西方向の断面では、ほぼ水平にラミナが見られ、東端部でわずかに東側に向け低く傾斜している。

遺物は、わずかな黒色土器と伴に50コンテナ以上の土師器・須恵器などが出土しており、当遺跡出土遺物の大半を占める。特筆すべきものとして、皇朝十二銭の一つである『隆永通寶』が1枚、馬の歯が数本出土している。他に、縄文時代の石鏝や弥生時代の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器・埴輪などが出土している。

第6層の下部でG.L.-3.6m (T.P.+10.7m)の掘削深度まで達したため、全面的調査を終了し、下層確認のため調査区東半部に幅1.5m・長さ10mのトレンチを古代流路に直交する形で南北方向に設定し、深さ約1.5m (T.P.+9.2m)まで掘削を行った。

その結果、第6層の層厚および第7層の堆積を確認した。

第7層は、3層に区分される。

第7-1層は、暗オリーブ灰色の極細砂で、層厚約0.2mを測り、やや北東側に向かって厚みを減じる。

第7-2層は、暗灰色の粘土で、層厚は約0.7mを測り、わずかに土壌化がみられる。断面には、第7-2層上面からの足跡の踏み込みが多数確認された。

第7-3層は、暗灰色の粘土で、層厚は0.2m以上を測る。事業者のボーリングデータでは、粘土層が約3m堆積しているとされる。第7層からは、遺物は出土していない。

第2節 検出遺構と遺物

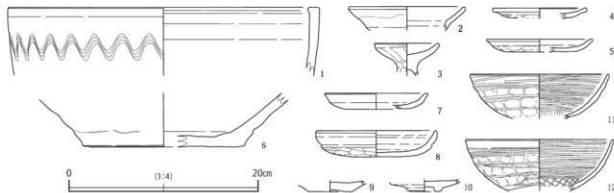
本調査では、5面の遺構面を検出した。

1. 第1面

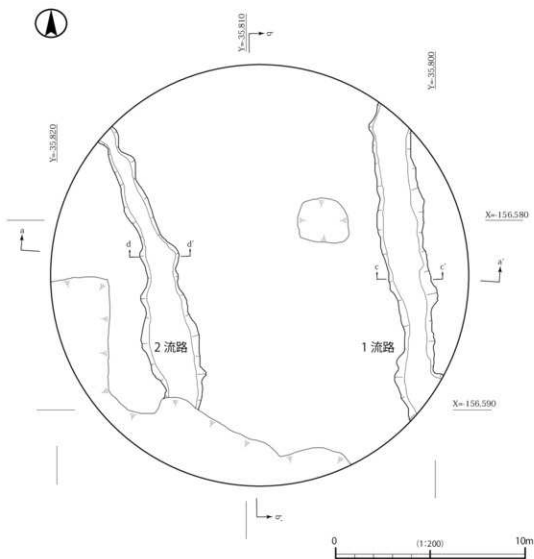
第1面は、盛土および現代耕作土を機械掘削で除去後、第3-2層上面で検出された遺構面で、T.P.+12.3～12.4mを測り、西側にわずかに低くなる。全面に幅0.2～0.5m・深さ0.05mの南北方向の鋤溝群が検出された。

遺物には、磁器碗や土師器小片が出土しているが図示できるものはなく、中世以降と考えられる。

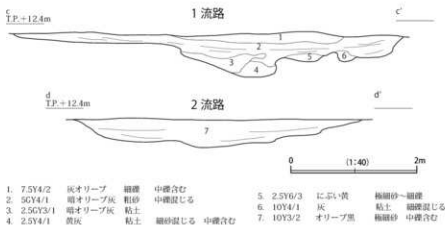
第3層から出土した遺物には、瓦質火鉢(1)、陶器小鉢(2)、土師器杯(8)・小皿(4・5・7)・ミニチュア高杯(3)、瓦器椀(11・12)、備前焼き甕(6)、青磁皿(9)、白磁碗(10)などがあり、いずれのものも小破片である。瓦質火鉢や陶器などから、16世紀以降に属すると考えられる(第8図)。



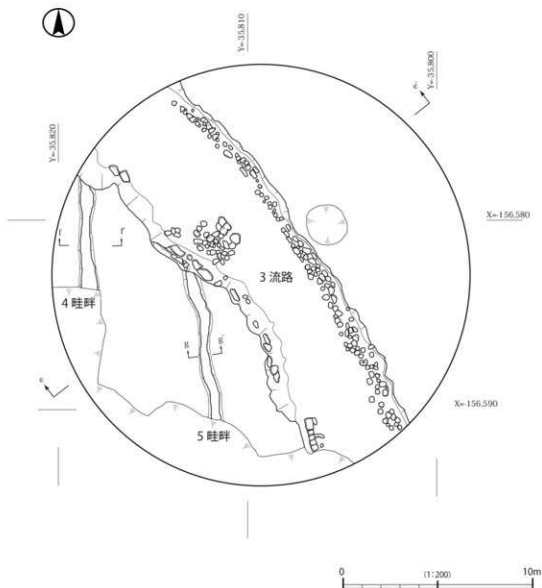
第8図 第3層 出土土器



第9図 第2面 全体平面図



第10図 第2面 1・2流路 断面図



第11図 第3面 全体平面図

2. 第2面

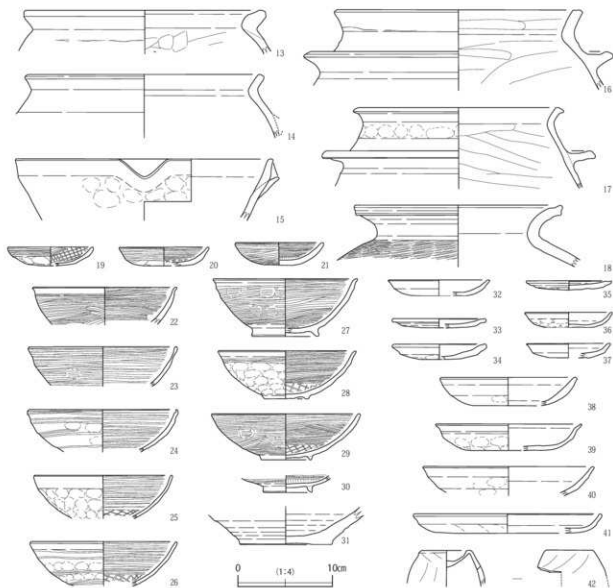
第2面は、第4層上面で検出された遺構面で、T.P.+12.2m前後を測る。流路を2条検出した（第9・10図、図版1-2）。

1流路は東端部に位置し、幅1.2～2.5m・深さ0.1～0.3m・検出長16.7mのやや西に振る南北方向に伸びる。埋土は、6層に細分されるが、概ね2層に区分でき下層に粘土、上層に粗砂および細礫が堆積している。中央部で深く二段落ちになっていた。

2流路は調査区の西側で検出され、幅0.6～3m・深さ0.1～0.3m・検出長約15mである。埋土は、オリブ黒色の中礫を含む極細砂である。

これらの流路からは、古代以前の土師器・須恵器の小片がわずかに出土している。ほぼ並行して流れ、いずれも調査区外に伸びる。

遺物からこの面の時期は確定できないが、下層の3流路から中世前期の瓦器等が出土していることか



第12図 第3面 3流路 出土土器

ら、それらよりは新しくなると思われる。

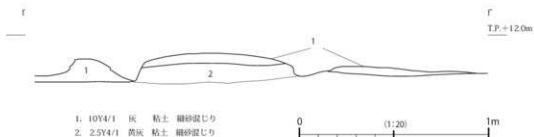
3. 第3面

第3面は第5層の灰色粘土層上面で検出した遺構面で、T.P.+ 11.8m前後を測る。流路1条と畦畔2条を検出した(第6・11図、図版2・3)。

3流路は、幅約5~7m・深さ約0.8mを測り、南東から北西に向け蛇行し、両端は調査区の外へ伸びる。東側肩部は大きく抉れ、反対側の西側肩部では極細砂層が堆積していた。埋土は、大きくは上層が浅黄色の大礫を含む細砂~中礫で、下層が灰色の細礫~中礫である。上層は、流路肩部より0.3mも盛上がり、両側に溢れ出していた。また、両肩部には、第5層の粘土が浸食されブロック状に落込んでいる様子が観察された(図版3-2)。

遺物は土器があり、古代のものを多く含むが、中世の瓦器碗や土師器羽釜などがある(第12図、図版6・7)。

土師器には、羽釜・鉢・皿がある。(13・14・16・17)はいずれも外反する口縁部をもつ羽釜である。(17)は、外反する口縁部の端部が面をもち、わずかに外方へ拡張する。罫がやや上方に向けて付くこと



第13図 第3面 4畦畔 断面図

や体部がやや長胴形になりそうな形態からやや時期が遡る可能性がある。(15)はわずかに外方に開く直口の捏鉢で片口をもつ。(32~37)は小皿で、(33・35)が手の字口縁の退化したもので、(32)は口径から古代に属すものと思われる。(38~40)の杯は、(38・40)が二段ナデを施し、(39)は口縁端部がわずかに外反する。

(41)の皿は、口縁部内面に沈線を1条巡らせている。(42)は竈のミニチュアで、いずれも、古代のものである。

(18)は須恵器裏の口縁部から体部破片で、短く外反する口縁部の端部は上方にわずかに立ち上がり外端をもつ。体部外面に平行叩き目を施す瀬戸内系のものである。(31)は東播系須恵器捏鉢の底部破片である。

(19~21)は瓦器小皿で、(19・20)は見込みに格子状暗紋を施し、前者は口縁端部にまでおよび、底部外面に指押さえを施している。後者は底部外面にヘラケズリ状ナデを施す。(21)は見込みに平行暗紋を施し、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。口径9.2cm・器高2.6cmを測る。

(22~30)は瓦器碗で、(28)がほぼ正形である以外は破片である。(24)は口縁部内面に沈線1条を巡らす大和型のものである。(27)は口径15.5cm・器高6.0cm、(28)は口径14.8cm・器高5.2cmを測る。

以上の遺物から、この流路は、中世前期の12世紀に属すると思われる。

4畦畔は、流路西側の調査区の西端に位置し、わずかに西に振る南北方向に伸びる。幅0.8m・高さ0.15m・検出長約4mで、北端部は3流路に切られて、南半部は後世の攪乱で消失していた。

5畦畔は、4畦畔の東側約5mに位置し、幅0.5~0.7m・高さ0.15m・検出長約8mを測る。ほぼ4畦畔に平行し、北側は3流路に切れ、北半部分の高さもほぼ痕跡が残る程度に削平を受けていた。南側は後世の攪乱で消失している。この畦畔は、下層の第4面に伴う6畦畔の上位に位置し、灰色の粘土層が畦畔上に層厚を一にして堆積していることから、6畦畔の高まりを踏襲した擬似畦畔であることが判明した。

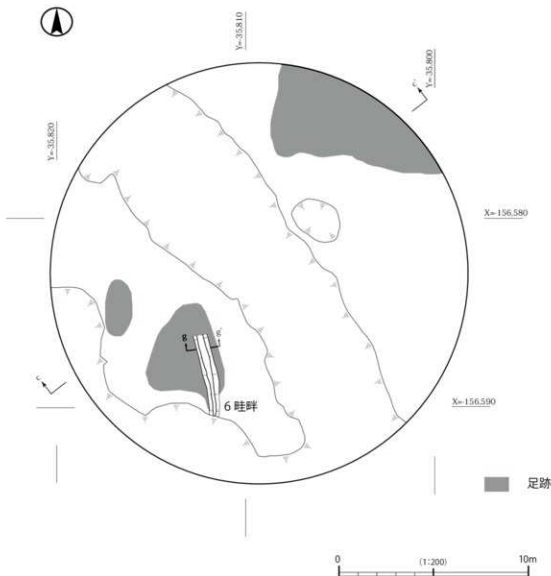
第3面では、上層の砂礫により南北方向および南南東-北北西方向等の無数の小溝状の窪みが穿れ、特に東半部側では、3流路の砂礫が大きく溢れ出し、粘土層が大きく削平された様子が窺われる。

検出面からは、黒色土器の小片や土師器・須恵器がわずかに出土することから、古代に相当すると考えられるが詳細は不明である。

4. 第4面

第4面は、第5-2層上面で検出し、T.P.+11.6~11.7mを測り、東端部分で東へわずかに低くなる。畦畔を1条と足跡群を検出した。

6畦畔は、調査区の西南部分に位置し、幅0.5~0.8m・高さ0.15m・検出長4.3mを測り、やや西に振る南北方向に伸びる。南側は後世の攪乱で消失し、北半部は上層の砂礫により削平を受けている。周



第14図 第4面 全体平面図

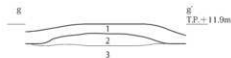
辺で人の足跡を検出している（図15、図版4）。

調査区の東半部では、畦畔が検出されなかったが、北東部で人や鹿の足跡が集中している部分があった。

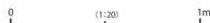
なお、東半部分では、第5－2層が薄く、下層の砂礫が部分的に覗いていた。この面からは、黑色土器・土師器・須恵器の小片がわずかに出土したことから、古代に属すると考えられるが詳細は不明である。

5. 第6層

第5層の粘土層以下の第6層は、厚さ1m以上の砂礫層が調査区全面に検出された。東西・南北断面の土層による堆積状況から、水平方向のラミナが約10cm間隔で認められ、流水による堆積であ



- | | | | | |
|----|----------|-------|----|-------|
| 1. | 2.5Y4/1 | 黄灰 | 粘土 | 細砂混じり |
| 2. | 7.5GY4/1 | 暗緑灰色 | 粘土 | 細砂混じり |
| 3. | 5GY4/1 | 暗オリーブ | 粘土 | 細砂混じり |



第15図 第3面 5 畦畔・第4面 6 畦畔 断面図

ることが判明した(図版5-1・2)。そこで、流れる方向を確認するために、45度(北へ30度)振った断面で再度観察すると、わずかに北西方向にラミナが上がるのが認められた。このことから、この流水堆積の方向は南南東から北北西に向かっていと推測される。

また、この堆積層は、約250m東南側の大阪府教育委員会の調査では確認されておらず、その調査地よりさらに南側に位置していたものと考えられる。なお、当調査地の古代の第6層上面がT.P.+11.4m前後であるのに対して、大阪府教育委員会の調査地の弥生・古墳時代の遺構面がT.P.+11.8~12.5mと高い位置に立地している。

この流水堆積層からは、コンテナ50箱以上の大量の遺物が出土している。遺物の出土状況は、細礫~中礫層に多く混じっており、上層から下層にかけて時期が古くなることはなく、万遍なく様々な時期の遺物が出土している。最下層で、下層の粘土に張り付くように銭貨が1枚出土している。

なお、弥生時代の石器に関しては、下層からコンテナ3箱分が出土している。

遺物には、古代に属す須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・土馬・製塩土器・鞆の羽口・土錘・銭貨・砥石などがあり、古墳時代前期から後期の須恵器・土師器・埴輪や、弥生時代前期から後期の土器・弥生時代中期の石器、縄文時代の土器・石器などが出土している。

古代の土器

須恵器

古代の須恵器には、蓋杯・壺・甕・鉢などがある(第16・17図)。

(43~53)は須恵器杯蓋で、(51)の口径26.8cmの大形の杯Gの蓋を除き、他は口径11.2cm~20.0cmの杯Bの蓋である。(43・46)の宝珠つまみは退化傾向にある。

(56・57・59・60)は須恵器杯Aである。口径11.0cm~13.2cm・器高3.2cm~4.0cmを測る。(56・57)は底側部を強くナデることで高台を付したように見える。

(62~70)は須恵器杯Bで、口径10.8cm~14.8cm・器高3.6cm~4.7cmのものがある。

他の杯には、(55)がわずかに外反する口縁部をもつやや小形のもの、(58)がやや開く口縁部の端部が内方へわずかに拡張し外端面をもつものがある。

(54)は須恵器皿で、平坦な底部から屈曲し、外方へ開く口縁部の端部はわずかに内外に肥厚し上端面をもつものである。(61)は須恵器大形の高台をもつもので、皿か杯になると思われる。

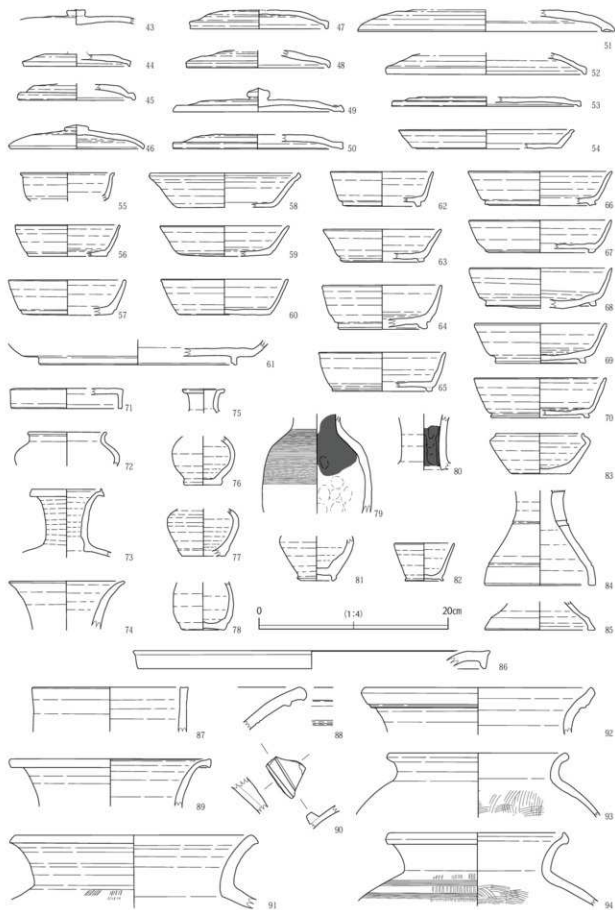
(71)は須恵器短頸壺の蓋で、つまみ部を欠損している。(72・83)は小形の須恵器短頸壺である。前者は短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや肩の張る体部で、後者が短く立ち上がる口縁部の端部が尖り気味になり、肩部が張り屈曲して平底のものである。口径9.1cm・器高4.2cmを測る。(87)は大形の直口壺で、直立する口縁部の上端は面をもつ。

(73~81)は須恵器壺で、(73)は筒状の頸部に外反してわずかに上方へ拡張し、外端面をもつもので、(74)は外反する口縁部の端部が尖り気味に終わるものである。(75~78・81)は小形のもので、(76~78)は底部が糸切りされており、(81)は高台をもつ。(79・80)は体部および頸部破片で、内面に漆が付着している。

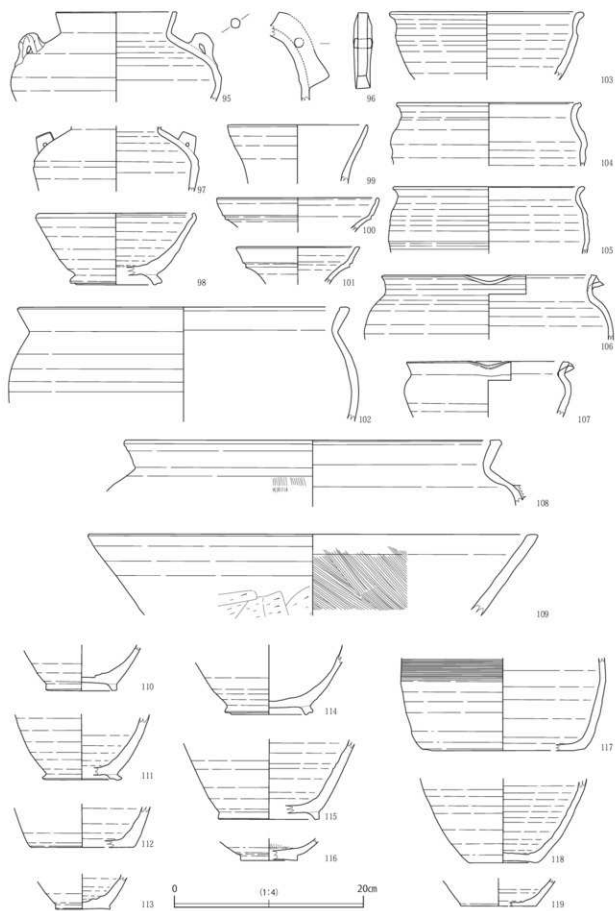
(82)は須恵器小形碗Bで、高台をもつ直口のものである。口径4.4cm・器高4.2cmを測る。

(84・85)は高杯の脚部破片である。前者は長脚2段透かし、後者が短脚で、いずれも脚台端部に屈曲し開き、下端面をもつ。

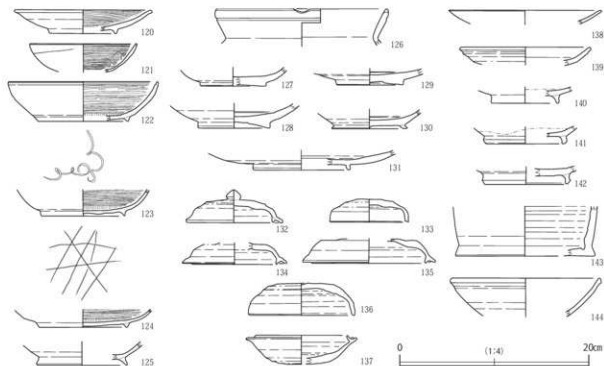
(86・88~94・102・108)は須恵器甕で、中形から大形のもので、全容のわかるものはない。(86・89)



第16图 第6层 出土土器(1) 古代須惠器



第17图 第6层 出土土器(2) 古代須惠器



第18図 第6層 出土土器(3) 古代黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器

は外反する口縁部の端部が上・下にわずかに拡張し外端面をもつ。(88・91)は外反する口縁部の端部がわずかに垂下する。前者は凸線を2条施す。(92)は外反する口縁部が屈曲しさらに外方へ開く。屈曲部上に凹線を1条巡らす。(93)は短い筒状の頸部に玉縁状の口縁部をもつ。(94)は口縁部端部が内方へ立ち上がり、屈曲した外端面をもつ。

(102・108)は大形の須恵器甕で、やや外方へ開く口頸部の端部が内方へわずかに肥厚し上端面をもつ。後者には、縦位の半環状の把手が付く。

(90)は、肩部の小破片で、縦位の断面方形の凸帯を張り付けている。

(95~97)は、把手付きの須恵器壺である。(95・97)は直口の壺で、前者には肩部に断面円形の縦に半環状のものを付け、後者は台形状の板を縦に張り付け、横に径3mmの穴を穿っている。(96)は把手部分のみを残すもので、板状の粘土を肩部のカーブに合わせ張り付け、やや上位に径0.9cmの穴を穿っている。

(98)は須恵器碗で、高台を付ける。外方へ開く口縁部の端部は内上方へつまみ上げられる。胎土に白色の粘土粒が多く含まれることから、他地域産のものと思われる。口径16.6cm・器高7.6cmを測る。

(103~107)は須恵器鉢で、短く外反する口縁部をもつ。(106・107)は片口である。

(109)は須恵器盤で、口径47.8cmと大形のもので、外方へ開く口縁部の端部は上端面をもつ。

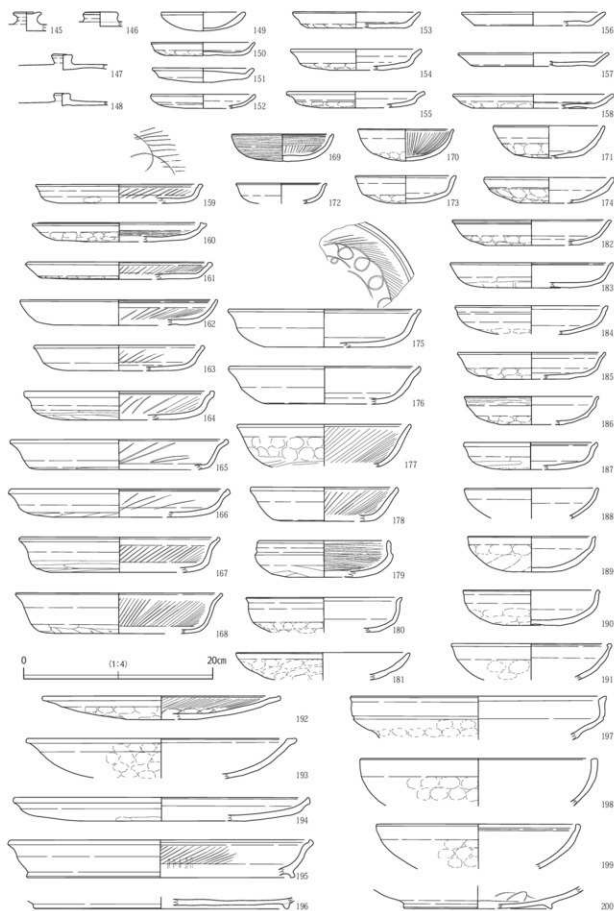
(99)は大形の提瓶の口縁部と思われる。(100・101)は、甕の口縁部である。

(110~119)は底部破片で、壺ないしは鉢のものと思われる。

黒色土器

(120~125)は黒色土器で、いずれも内黒で、(120)は皿であり、他は碗である。(120)は口径14.6cm・器高2.6cm、(122)は口径16.0cm・器高4.2cmを測る。(121・123)は、内面にヘラミガキ後螺旋状暗文を付加し、後者は底部外面にヘラ記号を施している。

(126)は瓦質土器の甕で、やや外方に開く口縁部に凹線を1条巡らす。焼成後に口縁端部の一部を打



第19图 第6层 出土土器(4) 古代土师器

ち欠く。

緑釉陶器

(127~131)は緑釉陶器で、いずれも底部破片である。(131)が皿である以外は椀である。(127~129)は幅広輪高台である。(127)がやや軟質で、他は須恵質で硬質である。(131)は外面に釉はかかっておらず、内面にかろうじて残存していた。

灰釉陶器

(138~143)は灰釉陶器で、(138・139)が皿の口縁部小片で、内外面伴に釉がかかっている。後者はやや焼きが軟質である。(140~142)は高台をもつ椀で、底部内外面には釉はかかっていない。(143)は壺と思われ、平底で内面に輪軸の凹凸を顕著に残す。体部外面にのみ釉がかかって垂れている。

その他

(144)は白磁碗で、口縁端部がわずかに玉縁状になる。

(132・134・135)は杯G蓋で、(132)は口径8.4cm・器高3.4cmを測る。(133)は小形の短頸壺の蓋である。(136・137)は杯H蓋および身である。後者は口径9.6cm・14.6cmを測る。

土師器

土師器には、皿・杯・椀・壺・高杯・甕・羽釜・鍋・甕などがある(第19~23図)。

(145~148)は土師器杯の蓋で、つまみ部を残す。全容のわかるものはない。つまみ部の径は1.8cm~3.7cmを測る。

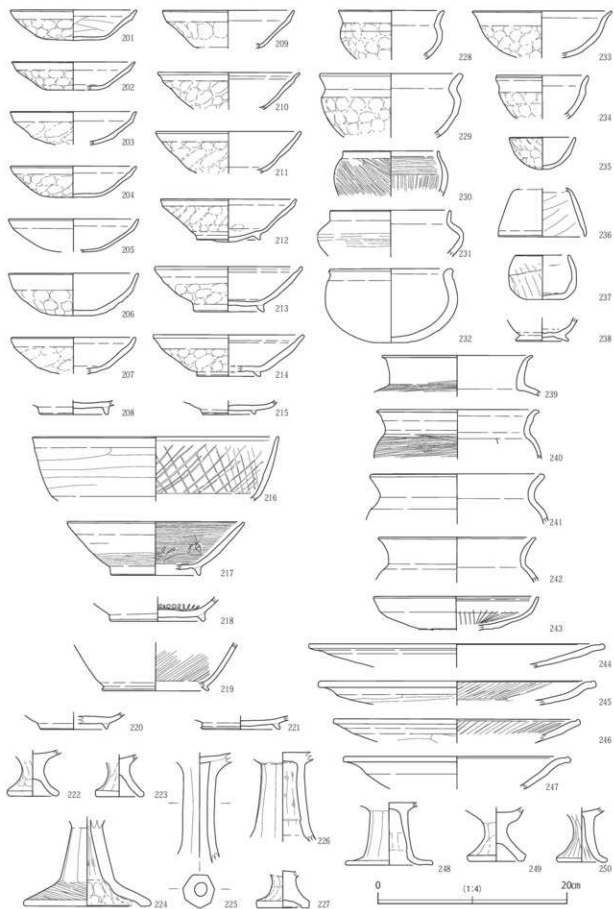
(149~166・192・194)は土師器皿で、(149~152)が小皿で、(194)が大皿である。

(149)は口径9.0cm・器高2.0cmを測り、体部が丸みをもつ。口縁部に厚みがあり底部にかけて薄くなる。(151)は口径10.5cm・器高1.5cmを測り、底部の厚みが1.2cmあり、底部内面が凸面をもつ。

(150・153~155・158)は口径11.0cm~17.0cm・器高1.4cm~2.2cmを測り、わずかに外反する口縁部をもち、底部外面に指押さえを顕著に残す。(156・157)は、平坦な底部から斜め外方へ口縁部が開く。底部外面に指押さえを顕著に残す。後者は、口径15.8cm・器高1.4cmを測る。(159)は口径17.5cm・器高2.0cmを測り、わずかに外反する口縁部の端部が丸みをもち、内面の端部下に沈線を1条巡らす。口縁部の外面にヨコナデを、口縁部内面に放射状暗文・底部に螺旋状暗文を施す。(160)は口径18.4cm・器高2.0cmを測り、わずかに外反する口縁部の端部がわずかに内方へ肥厚し上端が凹面をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、体部内面に横方向のヘラミガキを施す。(161~166)は、内面に放射状暗文を施すもので、(164~166)は底部外面にヘラケズリ状ナデを施す。(192)は口径25.0cm・器高2.5cmを測り、丸みを帯びた底部から外反しわずかに立ち上がる口縁端部をもつ。口縁部内面に放射状暗文・底部内面に螺旋状暗文を施す。底部外面に指押さえを顕著に残す。(194)は口径31.2cm・器高2.5cmを測り、外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。調整は磨滅のため不明である。

(195・196)は高台をもつ土師器皿で、前者は口径31.8cm・器高4.0cmを測り、外反する口縁部の端部がわずかに内上方へつまみ上げられる。内面に放射状暗文を施す。

(167・168・175~191)は土師器杯で、(167・168・175~178)は口縁部端部が内方へ肥厚するもので、沈線を1条巡らすものもある。内面に放射状暗文を施し、底部外面にヘラケズリ状ナデを施す。(179)は体部との境目に段をもち、直口する口縁部をもつもので、内面に横方向のヘラミガキ、底部外面にヘラケズリ状のナデを施す。口径13.6cm・器高3.9cmを測る。(180)は口縁端部がわずかに外方へつまみ上げられる。底部外面に指押さえを顕著に残す。(181)は浅い椀形で、外面の口縁端部下に指押さえを



第20圖 第6層 出土土器(5) 古代土師器

顕著に残す。(182~187)は皿状のもので、(186)が口縁部外面にヘラミガキを施す以外はナデで、底部外面に指押さえおよび指ナデを施している。(188~191)は椀形で、(189)は口縁部端部が内傾する段をもつ。口径13.5cm・器高3.9cmを測る。(191)は口縁部端部が内方へ肥厚し上端をもつ。いずれも、内面にナデを施し、底部外面に指押さえを残す。

(169~174)は小形の土師器椀で、(169)は口径10.6cm・器高2.9cmを測り、口縁部端部内面に沈線1条を巡らす。外面・口縁部内面に丁寧なヨコヘラミガキ、底部内面に放射状ヘラミガキを施す。(170)は口径10.0cm・器高3.4cmを測り、口縁部端部は尖り気味に終わる。口縁部外面にヨコナデ・底部に指ナデおよび指押さえを、内面に放射状暗文を施す。(173)は口径10.6cm・器高2.9cmを測り、口縁部端部の内面の一部に煤が付着しており、燈明皿として使用されたとと思われる。

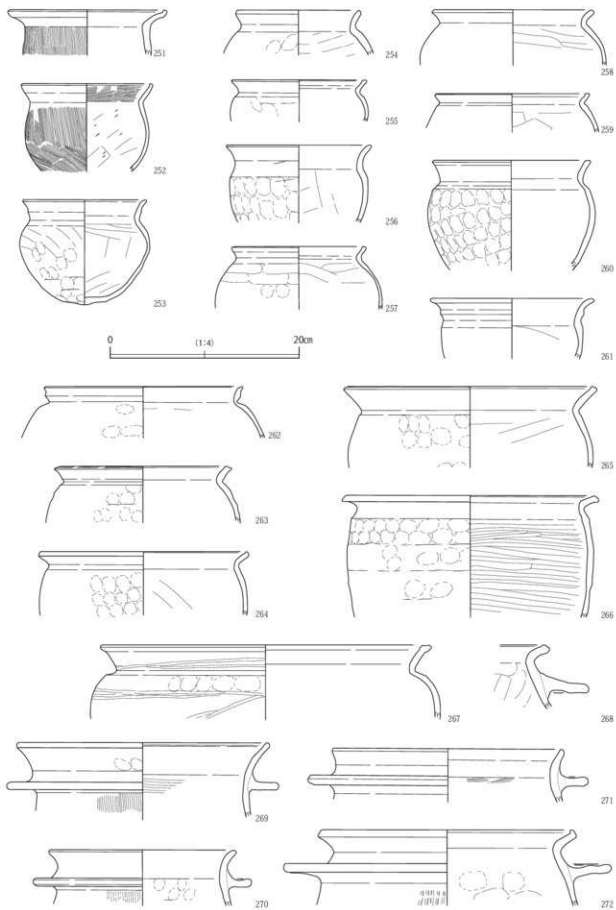
(193・197~200)は土師器椀で、(193)は浅い椀形に、口縁部端部が外方へわずかに拡張し上端面をもつ。(197)は体部が屈曲し上方へ立ち上がり、口縁部端部がわずかに外方へつまみ上げられ、内傾する面をもつ。屈曲部外面に凹線を1条施す。(200)は高台をもつもので、内面に螺旋状暗文を施す底部破片である。

(201~221)は土師器椀で、(201~207・209)は平底のもので、(208・210~221)は高台をもつものである。前者は口縁部の端部が斜め外方へのび、口縁部の端部は丸みをもつ。体部内面にナデを施し、体部外面に指押さえを顕著に残す。(201)が口径13.4cm・器高3.2cmを測り、(206)が口径13.6cm・器高4.5cmを測る。(208・210~215)は前述の椀に高台が付くもので、体部外面に指押さえを顕著に残す。(212)は口径14.5cm・器高4.6cm、(213)が口径15.5cm・器高4.8cmを測る。(217)は斜め外方へのびる体部に高台が付くもので、内外面に横方向のヘラミガキを施した後、体部内面に螺旋状暗文を数か所に施す。口径18.6cm・器高5.7cmを測る。(218)は底部破片で、内面の底部見込み面に螺旋状暗文を施す(図版11)。(216)は口径26.0cmの大形のもので、内面に粗い斜格子状暗文を、外面に横方向の粗いナデを施す。(219)は口縁部を欠損するもので、体部内面に斜め方向のヘラミガキを施す。

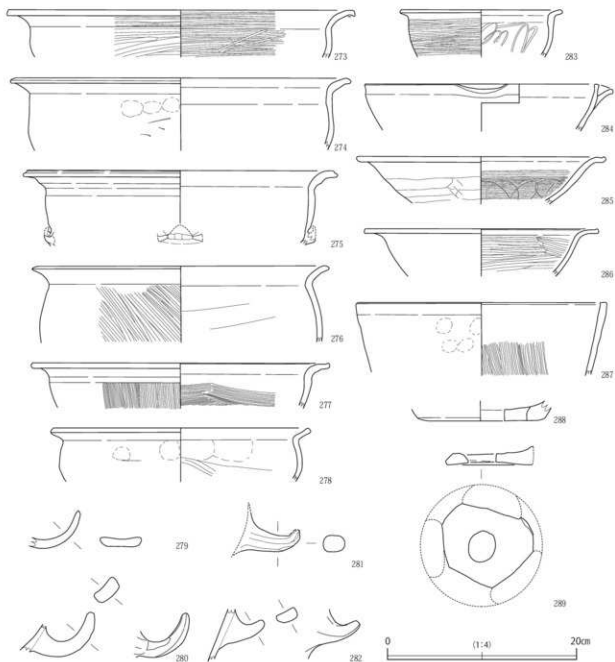
(228~235・237・238)は小形の土師器椀である。(228・229・234)は口縁部が短く外反し、やや肩の張る体部をもつ。体部外面に指押さえを顕著に残す。(233)は短く外反する口縁部の端部が尖り気味に終わり、やや扁平な体部をもつ。体部外面に指押さえを顕著に残す。(230)は口縁部がわずかに外反し球形の体部をもち、内外面にヘラミガキを施す。(231)は口縁部が立ち上がりやや肩部が張る器形で、体部外面に横方向のヘラミガキをわずかに残す。(232)は口縁部端部がわずかに外方へ肥厚し、半球状の体部をもつ。表面磨滅のため、調整は不明である。(235・236)は、ミニチュアの籠セットになると思われる。(237)はミニチュアのもので、内外面に指ナデを施す。(238)は上げ底の底部破片である。

(239~242)は土師器壺で、全容の判るものはない。(239)は短い筒状の頸部にわずかに外反する口縁部の端部が尖り気味に終わり、体部が張る。外面にヘラミガキを施す。(240)は短い筒状の頸部に、短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し外端面をもつ。体部がやや膨らみ外面にヘラミガキを施す。(241・242)は内外面伴にナデを施す。

(222~227・243~250)は土師器の高杯である。(243)は椀形の杯部で、杯底部外面にわずかな段をもち、口縁部内面に凹線を1条巡らす。杯部内面に放射状暗文を施す。(244~247)は外反する口縁部をもつもので、口縁部の端部がわずかに上方へ立ち上がる。(245・246)は内面に斜め方向の暗文を施し、外面にヘラケズリ状ナデを施す。それら以外は、表面磨滅のため、調整は不明である。(222・223・227・249・250)は小形の脚部を残すもので、手づくねのものである。(224~226・248)は脚部破片で、脚柱



第21圖 第6層 出土土器(6) 古代土師器

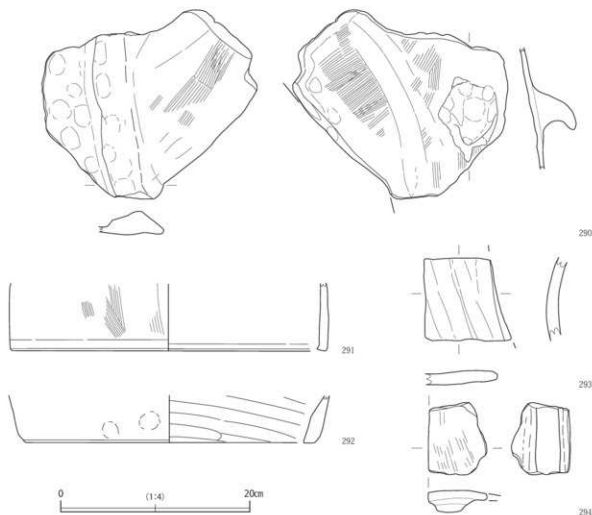


第22図 第6層 出土土器(7) 古代土師器

部外面を面取り状に削っている。

(251～267)は土師器甕である。(251・252)は外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり、体部がわずかに膨らむ。体部外面に縦方向のハケメ、内面に前者がナデ・後者がヘラケズリを施している。

(253)は図上復原で、短く外反する口縁部に短い筒状の頸部、屈曲してやや肩の張る体部に丸底である。体部外面の上半に指ナデ・下半に指押さえを、内面に指ナデおよびナデを施す。口径13.0cm・器高12.2cmを測る。(254・256・258)は、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや肩の張る体部をもつ。(255・257・259・260)は、口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し上端面をもつ。いずれのものも、体部外面にナデおよび指ナデを施し、指押さえを残す。(261)は短く外反する口縁部が頸部との境目に段をもつ。(262)はわずかに立ち上がる口縁部の端部が外方へわずかにつまみ出され、上端部が凹面をなす。(263～266)は短く外反する口縁部の端部が面をもちわずかにつまみ上げられる。(266)の体部内



第23図 第6層 出土土器(8) 古代土師器

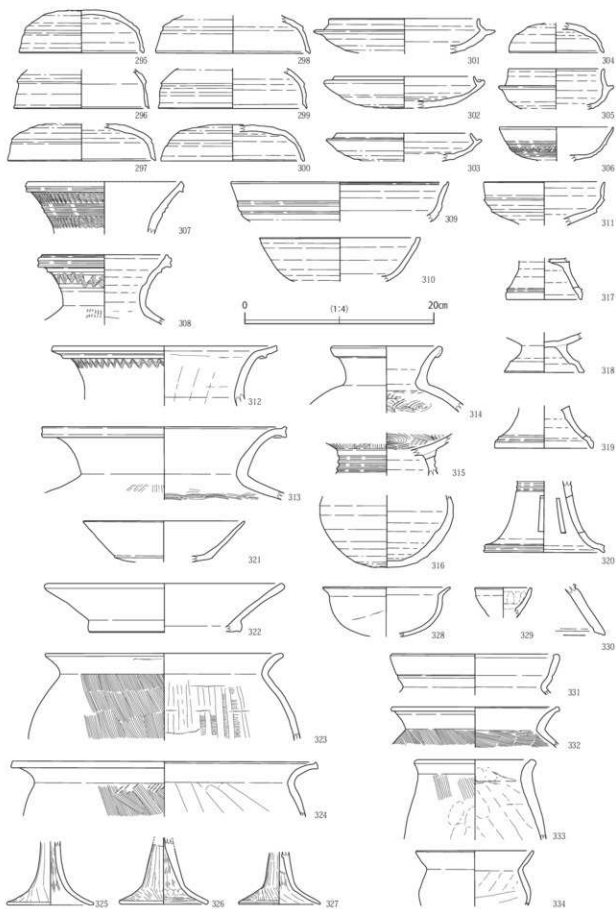
面に横方向の粗いヘラミガキを施す。(267)は大形のもので、短く外反する口縁部が内・外方へつまみ出され上端が凹面をもつ。肩部が張る体部で、外面に指押さえをした後、粗い横方向のヘラミガキを施す。

(268～272)は土師器羽釜である。(269～271)は短く外反する口縁部の端部が丸みをもつ。体部外面に縦方向のハケメを施す。いずれも、角閃石を多量に含む暗褐色の生駒西麓産のものである。(268・272)は屈曲して短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ外端面をもつ。体部がやや膨らむ。羽釜は、体部外面の鈿部以下に煤が付着している。

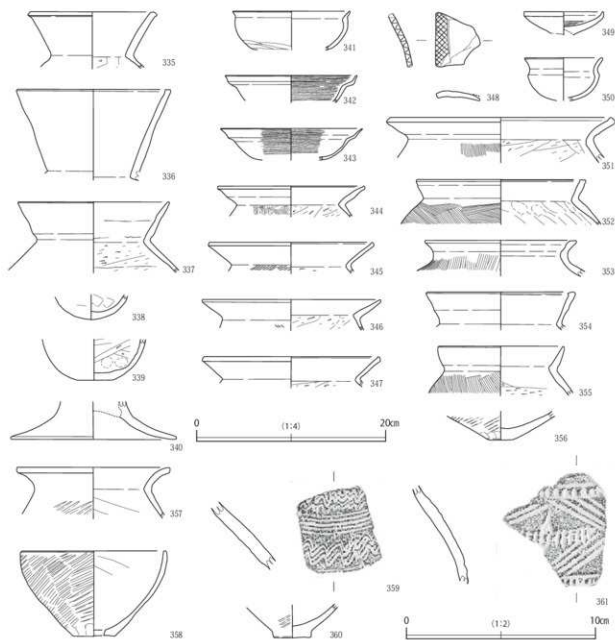
(273～278・283・286)は土師器鉢および鍋である。(284)は直口の椀形片口鉢である。(285・286)は外反する口縁部をもつ浅鉢で、いずれも、体部外面に指ナデおよびナデ、内面に横方向のヘラミガキを施し、前者はさらに螺旋状暗文を施している。(283)は短く外反する口縁部のやや小形の鉢で、体部外面に横方向のヘラミガキ、内面に螺旋状暗文を施している。(273～278)は大形の短く外反する口縁部をもつものである。体部の調整は、(273)が内外面に横方向のヘラミガキ、(276)が外面に斜め方向のヘラミガキ、内面に横方向のナデ、(277)が内外面にハケメを施している。(275)は把手を付ける。

(279～282)は、土師器鍋および甗の把手である。

(287～289)は土師器甗で、(287)は直口の口縁部破片で、他は底部破片である。中心に円孔を穿ち周囲に不正楕円形の孔を穿っている。



第24図 第6層 出土土器(9) 古墳時代須惠器・土師器



第25図 第6層 出土土器(10) 弥生時代後期～古墳時代前期初頭土師器

(290～294)は土師器甕である。(290)は焚口付近の破片で、上端部分にひび割れの補修痕がある。肩部に下向きの把手を付ける。外面にハケメ後指ナデを、内面にハケメおよび指ナデを施し指押さえを残す。(293・294)は焚口の側縁部分で、後者は内面に粘土紐を帯状に付加している。(291・292)は底部破片である。(290・292・294)が角閃石を多量に含む生駒西麓産の土器である。

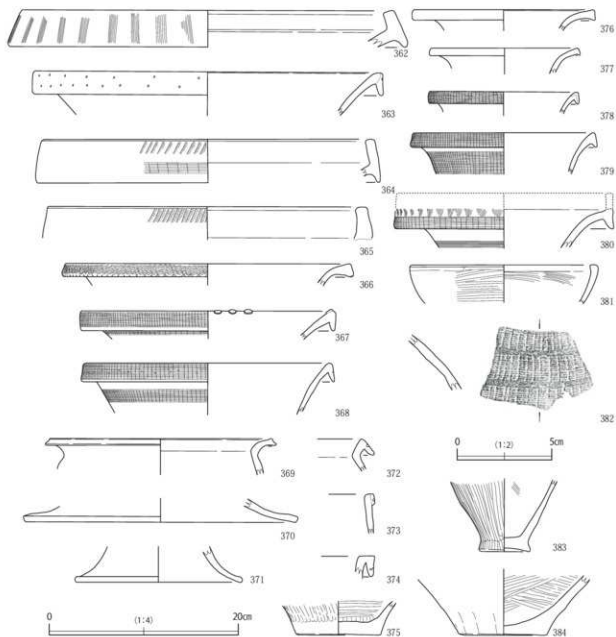
古墳時代中期から後期の土器

第24図は古墳時代中期から後期の遺物である。

(295～300)は須恵器杯蓋で、(295～299)は口縁部と天井部との境目に明瞭な稜線をもつ。(295)は、口径13.5cm・器高4.4cmを測る。(297)は、口径15.2cm・器高4.0cmを測る。(300)は口縁部と天井部の境目に凹線を1条巡らす。

(301～303)は須恵器杯身である。口径14.0～15.8cmを測り、口縁部が短く立ち上がる。

(304)は須恵器壺蓋である。口径10.0cm・器高3.5cmを測る小形のもので、口縁部端部は内傾する凹



第26図 第6層 出土土器(11) 弥生時代中期土器

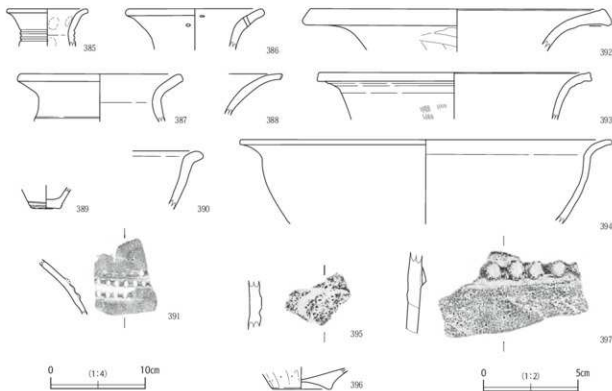
面をもつ。

(305・306・309～311・317～320)は、須恵器高杯である。(305・306・309～311)は杯部のみを残し、(305)は有蓋高杯で、他は無蓋高杯である。(317～320)は高杯の脚部のみ残存し、(320)が長脚2段である以外は短脚のものである。

(307・308・316)は須恵器壺である。(307・308)は壺の口頸部破片で、前者が口縁部端部に凹線文を1条・口頸部に波状文間凸線文2帯、後者が口縁部端部に凹線文を2条および口縁部に波状文を1条を施す。(316)は小形壺の体部下半から底部にかけてのものである。

(314)は須恵器横瓶の口頸部である。口縁端部に粘土紐を1帯付加する。体部内面に同心円文当て具痕を残す。

(312・313)は須恵器甕である。大形の口頸部破片で、口径24.0cm～26.0cmを測る。前者は外反する口縁部の端部が面をもち、やや下ったところに凸線文1帯・波状文1帯を施す。後者は無文で、口縁部端



第27図 第6層 出土土器(12) 縄文時代後期～弥生時代中期前葉土器

部が上下にわずかに拡張し面をもつ。体部外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残す。

(315・330)は須恵器器台である。前者は杯底部破片で、脚部に凹線文3条以上を施す。杯底部外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残す。後者は脚台端部の小片で、凹線文1条以上・斜線文を施す。

(321・322・325～327)は土師器高杯である。(321・322)は杯部を残すもので、他は脚部のみを残す。(321)は外方へのびる口縁部が杯底部との境目に明瞭な稜線をもち、(322)は杯底部との境目に段をもつ。いずれも、表面磨滅のため調整が不明である。

(323・324・331～334)は土師器甕である。(323・324)は大形のもので、体部外面にハケメ、内面にハケメ後指ナデを施す。(331)は内湾ぎみにのびる口縁部の端部が内方へわずかに肥厚する。外面に凹線文1条を施す。(332)は短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がる。体部の内外面にハケメを施す。(333)はわずかに外反する口縁部をもつもので、器壁が厚い。体部外面に指押さえ後ハケメ、内面にナデを施す。(334)は小形のもので、体部外面にナデ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。

(328・329)は土師器鉢である。前者は短く外方へのびる口縁部に浅い椀形の体部をもつ。後者は手づくねのものである。

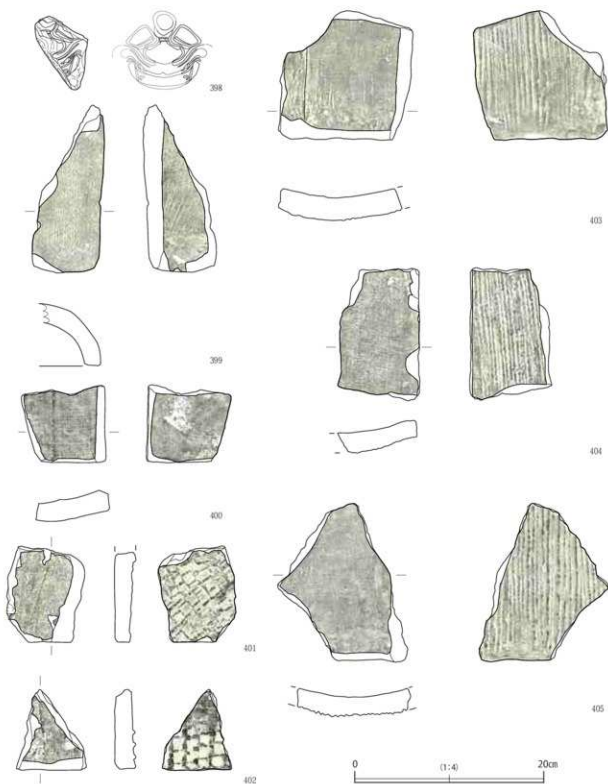
弥生時代後期から古墳時代前期の土器

第25図は弥生時代後期から古墳時代前期の遺物である。

(335～337)は土師器直口壺である。(335)は口縁部端部がわずかに垂下し面をもつ。(336)は口縁部端部が内方へわずかに肥厚する。いずれも、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産のものである。(337)は短い頸部に外方へのびる口縁部の端部が尖り気味に終わる。体部外面にナデ、内面にヘラケズリを施す。

(338・339)は土師器小形壺の丸底の底部である。

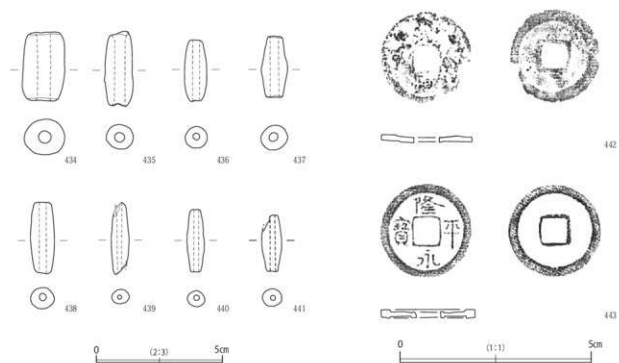
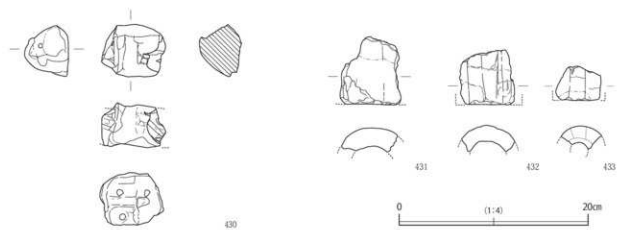
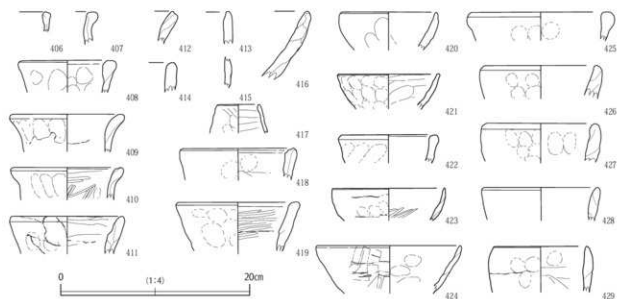
(341～343)は土師器鉢である。(341)は短く外方へのびる口縁をもつもので、体部内外面にナデおよ



第28図 第6層 出土瓦

び指ナデを施す。後二者は二重口縁をもつもので、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。(350)は小形のもので、短く外反する口縁部に半球状の体部をもつ。内外面にナデを施す。

(344~347・351~356)は土師器甕である。(344~347)は口縁部破片で、外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ(344・345・347)と、尖り気味に終わる(346)がある。いずれも、頸部内面に明確な稜をもつ。体部外面に(344)は叩き目後ハケメ、(345)が細かい叩き目を施し、内面にヘラケズ



第29図 第6層 出土製塩土器・銭貨・土製品

りを施す。すべて、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産のものである。(351)は短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。(352)はやや外傾する口縁部の上端部が凹面をもつ。体部外面にハケメ、内面に指ナデを施し指押さえを残す。(353)は短く外反する口縁部の上端部が凹面をもつ。体部外面に粗いハケメ、内面にナデを施す。(354)は外方へ開く口縁部の端部が内方へわずかに肥厚する。(355)は短く外方へのびる口縁部の端部は尖り気味に終わる。体部外面にハケメ、内面の頸部から少し下がったところからヘラケズリを施す。(356)は底部破片で、わずかな平底である。体部外面に叩き目、内面にナデを施す。

(349)は土師器小形器台の杯部で、内面にヘラミガキを施す。

(340)は土師器脚台である。

(348)は土師器手焙の覆部の小破片である。覆部端部に篋描きの鋸歯文、外面に斜格子文を施す。

(357・360)は弥生時代後期から古墳時代前期初頭の甕である。前者は短く外反する口縁部の端部が面をもち、頸部内面の屈曲は明確な稜をもつ。体部外面に叩き目、内面にナデを施す。後者は底部を残す破片で、突出した平底である。外面に叩き目を施す。

(358)は弥生時代後期の鉢である。直口の平底で、底部中央に焼成前の穿孔がある。体部外面に叩き目、内面にナデを施す。

(359・361)は壺体部の文様破片である。前者は波状文間に直線文を施し、後者は刻み目間に菱形および縦線文を施す。

弥生時代中期の土器

第26図は、弥生時代中期の土器である。

(362・364・365・380)は外反する口縁部の端部が上下に拡張するもので、口縁部に縦線文(362)、列点文・簾状文(364)、波状文(365)、扇形文・簾状文(380)などがある。(363・367・368・378・379)は外反する口縁部の端部が垂下するもので、口縁部に刺突文(363)、口縁部内面に円形浮文3個一対・端部および頸部に簾状文(367)、口縁部に刺突文および簾状文(368)、口縁部に簾状文(378)、口縁部および頸部に簾状文(379)を施すものがある。(382)は簾状文を施す体部破片である。以上の壺は、角閃石を含む暗褐色の生駒西麓産のものである。

(366・376・377)は外反する口縁部の端部がわずかに拡張するもので、(366)が端面に波状文・刻み目を施す以外は無文である。

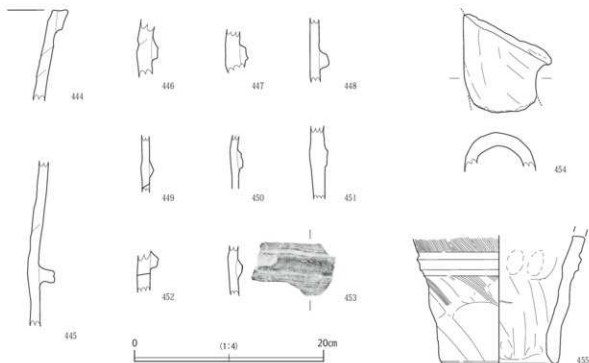
(369・372・383)は甕である。(369・372)は口縁部破片で、前者は短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。後者は大形で端部が垂下する。口縁部に刺突文を施す。(383)は底部を残し、突出しわずかな上げ底である。体部外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

(381・373・374)は鉢である。(381)は直口の椀形のもので、口縁部端部が内方へわずかに肥厚した上端面をもつ。体部外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。(373・374)は大形のもので、前者は口縁部端部に粘土紐を1帯張り付け、後者は垂下させている。両者ともに口縁部に刺突文を施す。角閃石を含む生駒西麓産のものである。

(370)は蓋の口縁部を残すものである。内外面にナデを施し、内面に煤が付着する。

(371)は脚台部の破片である。形状から台付き鉢の脚部と思われる。

(375・384)は壺底部である。前者は内外面にヘラミガキ、後者は外面にナデ・内面にハケメを施す。両者ともに底部に厚みがあることから、中期前葉に属すと考えられる。



第30図 第6層 出土馬歯

第1表 出土馬歯一覧表

掲載番号	登録番号	地区	出土層位	種名	左右	部位	詳細	備考	計測値(mm)
	128	19F-1・2j	第6層砂礫層	ウマ	不明	上顎白歯			
34-509	158	19F-1i	第6層砂礫層	ウマ	不明	下顎白歯			
34-510	206	19F-2i	第6層砂礫層	ウマ	不明	下顎白歯			
—	230	19F-1h・i	第6層砂礫層	ウマ	L	上顎白歯			
	248	19F-1・2i.1h	第6層砂礫層	ウマ	不明	下顎白歯			
34-506	254	19F-1h・i	第6層砂礫層	ウマ	L	上顎第2後白歯	歯冠前・後縁は一部破損	年齢は6~7才	歯冠幅 24.59 歯冠長25.6 歯冠高 58.85
—	271	19F-1h・i	第6層砂礫層	ウマ	不明	下顎白歯			
34-505	323	19F-1・2i	第6層砂礫層	ウマ	L	上顎第2後白歯	歯冠前・後縁は一部破損	年齢は約4才	歯冠幅 23.88 歯冠長 27.06++ 歯冠高63.1
34-508	405	19F-1・2i	第6層砂礫層	ウマ	L	上顎前白歯	頬側部破損		
34-507	420	19F-1・1i	下層確認トレンチ 第6層砂礫層	ウマ	L	上顎第3後白歯	舌側部破損	年齢は約5才	歯冠高 58.24
—	432	19F-1・1j	第6層 砂礫下	ウマ	不明	白歯			

縄文時代後期から弥生時代中期前葉の土器

第27図は、弥生時代前期から中期前葉のものと同文時代の土器である。

(385～389・391)は前期の壺である。(385)は小形で口頸部を残すもので、内外面にナデを施し、頸部に沈線文3条を施す。(386・387)は中形のもので、口縁部端部が丸みをもつ。前者は口縁部に2個1対の紐孔を穿ち、後者は頸部に削り出し凸帯を施す。(388)は大形で口縁部端部が面をもち、刻み目を施す。(391)は体部破片で、貼付け刻み目凸帯を3帯施すが、1帯は剝離して痕跡を残す。(389)は小形の底部を残すもので、底側部に沈線文2条を施す。

(392・393)は中期前葉の壺である。前者は口縁部の端部がわずかに上下に肥厚し面をもち、後者はわずかに立ち上がり面をもつもので、いずれも、無文のものである。

(390・394)は前期の大形の鉢で、短く外反する口縁部をもち無文のものである。

(395)は縄文時代後期の深鉢の体部破片で、文様が磨滅のため不明瞭である。

(396・397)は縄文時代晩期の深鉢の上げ底の底部および凸帯上刻み目1帯を施す体部破片である。いずれも、体部外面にヘラケズリを施す。角閃石を含む生駒西麓産のものである。

以上の縄文時代から弥生時代中期の土器群は、表面の磨滅が著しくかつ小片が多いことから、かなり上流から流されてきたものと思われる。

その他の遺物

その他の遺物には、古代の瓦、製塩土器、土馬、土鍾、鞆の羽口、銭貨や古墳時代の埴輪、自然遺物などがある。

瓦

第28図は瓦である。

(398)は土師質の軒丸瓦の瓦当面の一部で、獣面文の左半部を残す。厚さ2.0cmを測る。高句麗系のもので、船橋廃寺出土のものに似る。七世紀中葉以前と思われる。

(399)は土師質の丸瓦で、外面に細かい縄目痕・内面に布目圧痕を残す。厚さ2.0cmを測る。破損後煤が付着する。

(400～405)は平瓦である。(400)は須恵質である以外は土師質である。いずれも、完形のものではなく全容は不明である。(400)は側縁を面取りし、外面に擦り消し・内面に細かな布目圧痕を残す。厚さは2.0cmを測る。(401・402)は下端部を残す小破片で、外面に格子状叩き目・内面に布目圧痕を残す。厚さ1.9cmを測る。(403～405)は、外面に縄目圧痕・内面に布目圧痕を残す。厚さ2.2cmを測る。

製塩土器

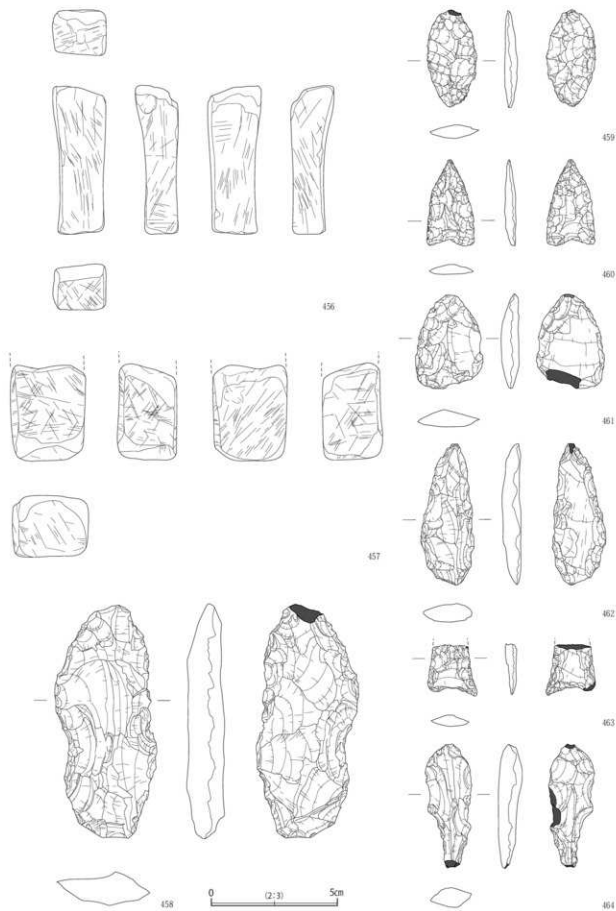
第29図の(406～429)は、製塩土器である。小片が多く完形になるものはない。

(406～410)は口縁部がわずかに外反し端部が肥厚するもので、長胴形のものである。(416・420～424)は椀形のもので、器壁が5mm程度の薄いものと1cm前後の厚いものがある。いずれのものも二次焼成を受け赤変している。内外面に指押さえを残すものがほとんどであるが、(410・419・423)のように内面に粗いヘラミガキを施すものもある。

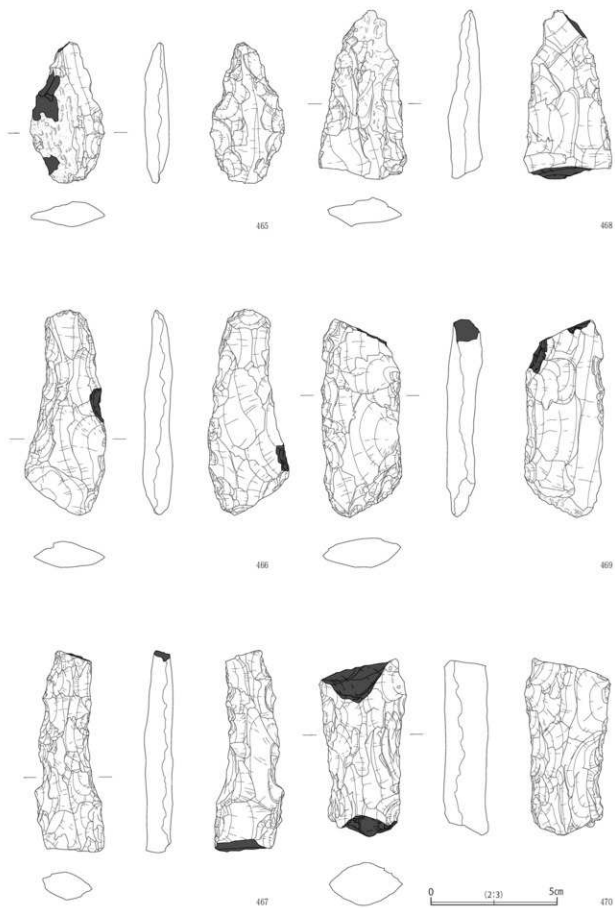
(417)は小形で内傾する口縁部をもつもので、器壁が3mmと薄い。古墳時代のものである。

土馬

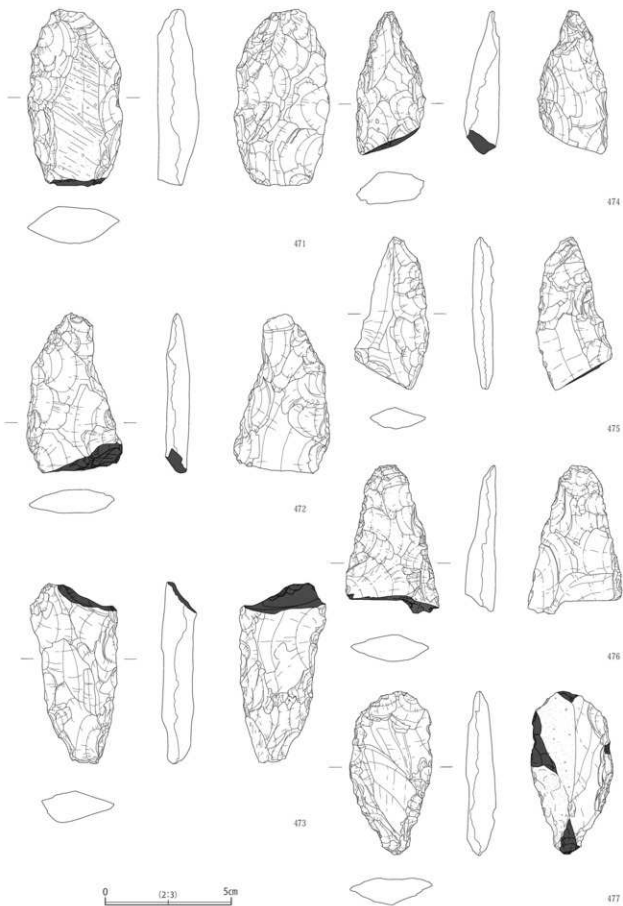
第29図の430は土師質の土馬である。胴体一部の破片で、鞍が乗る。左破断面に首の付根の痕跡がある。横口に2個・下面に3個の穿孔がある。側縁および下面に粘土の剝離痕が認められることから胴



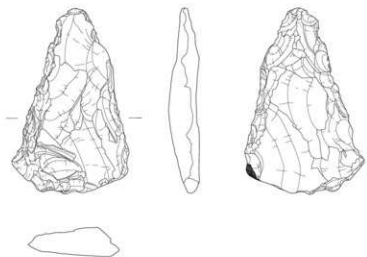
第31图 第6层 出土石器(1)



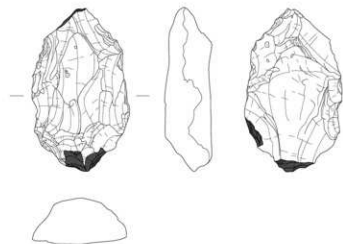
第32图 第6层 出土石器(2)



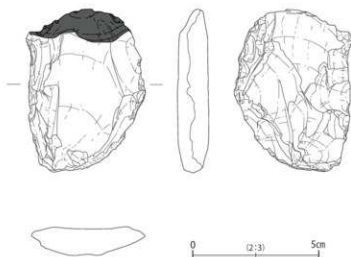
第33圖 第6層 出土石器(3)



478



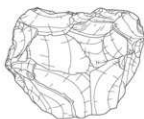
479



480

第34圖 第6層 出土石器(4)

0 (2:3) 5cm



481



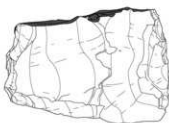
483



482

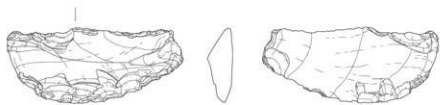


484

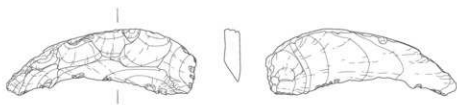


485

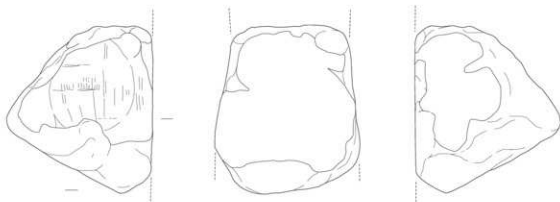
第35圖 第6層 出土石器(5)



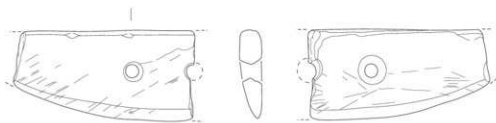
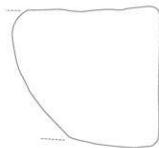
486



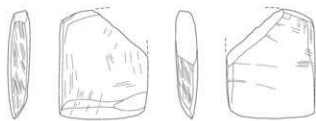
487



488



489



490



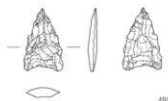
第36图 第6层 出土石器(6)

第2表 石器一覧表(1)

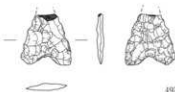
洋館 番号	写真図号番号	器種	地区	出土層名	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
31-456	35	砥石	19F-1h-i	第6層の礫層	5.9	2.1	1.7	28.9	ほぼ完成形 礫に使用面あり
31-457	35	砥石	19F-2h-i	第6層の礫層	(3.8)	3.0	2.4	43.0	礫岩
—	35-511	砥石	19F-12h-i	第6層の礫層	(4.9)	2.3	2.2	47.3	黒色片岩
31-459	35	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	(3.8)	2.0	0.5	3.9	サヌカイト
31-460	35	石鏝	19F-1h-i	第6層の礫層	3.4	1.9	0.5	2.6	先施部欠損 尖頭無基式
31-461	35	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(3.7)	2.7	0.7	7.2	サヌカイト
31-462	35	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	5.6	2.1	0.8	9.3	サヌカイト
31-463	35	石鏝	19F-1h	下部層2トレンチ 第6層の礫層	(2.0)	2.0	0.4	1.6	ほぼ完成形 凹縁無基式
32-464	35	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	5.6	2.9	1.0	15.0	先施部欠損 凹縁無基式
31-464	35	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	(4.9)	1.8	0.9	7.4	サヌカイト
31-458	35	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(9.2)	4.2	1.5	59.1	ほぼ完成形 中央部収縮跡残れあり
32-466	36	小刀	19F-1h-i	第6層の礫層	8.1	3.2	1.2	29.2	ほぼ完成形
32-467	36	小刀	19F-1h	第6層の礫層	(8.0)	2.8	1.2	25.7	両端部折損
32-468	37	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(6.7)	3.5	1.4	24.3	サヌカイト
32-469	38	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(7.8)	3.1	1.4	38.0	先施部折損 基底部に自然面残す
32-470	38	石鏝	19F-1-2h	第6層の礫層	(7.0)	3.5	1.8	48.1	両端部折損
33-471	38	石鏝	19F-1-2h	第6層の礫層	(5.0)	3.8	1.6	51.2	サヌカイト
33-472	36	小刀	19F-1h	第6層の礫層	(6.3)	3.8	0.9	23.6	サヌカイト
33-473	36	小刀	19F-1h	第6層の礫層	(7.1)	3.5	1.3	33.3	サヌカイト
33-474	37	小刀	19F-1-2h	第6層の礫層	(5.7)	2.8	1.4	20.7	サヌカイト
33-475	36	小刀	表層		(6.0)	3.0	0.9	14.0	サヌカイト
33-476	37	石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(5.9)	3.7	1.2	21.2	サヌカイト
33-477	38	尖頭器	19F-1h	第6層の礫層	6.5	3.3	1.2	22.0	サヌカイト
34-478	37	尖頭器	19F-2h	第6層の礫層	7.3	4.7	1.3	35.7	サヌカイト
34-479	37	楔形石鏝	19F-1h	第6層の礫層	(6.5)	3.9	1.8	51.7	サヌカイト
34-480	39	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	(6.4)	4.7	1.2	44.0	サヌカイト
35-482	38	石鏝	19F-1-2h	第6層の礫層	(5.5)	4.2	1.6	46.0	サヌカイト
35-483	37	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	(5.0)	4.3	1.5	39.3	サヌカイト
35-484	39	刃器	19F-1h	下部層2トレンチ 第6層の礫層	4.7	(3.3)	0.55	12.9	縦凸折損
35-485	40	刃器	19F-1h	第6層の礫層	(4.0)	6.6	1.6	62.0	サヌカイト
—	35-512	小刀		表層	(4.1)	2.3	1.0	9.7	サヌカイト
—	35-513	小刀	19F-1h	第6層の礫層	(4.4)	2.6	0.7	8.4	サヌカイト
—	37-514	楔形石鏝?	19F-1h	第6層の礫層	5.7	3.5	1.0	46.0	ほぼ完成形
—	37-515	尖頭器	19F-1-2h	第6層の礫層	4.6	3.2	1.3	18.4	サヌカイト
—	37-516	石鏝	19F-2h	第6層の礫層	(6.6)	4.2	2.2	64.0	ほぼ完成形 石鏝の未製品?
—	37-517	石鏝	19F-2h-i	第6層の礫層	(3.2)	5.0	1.4	27.3	折損 表面磨滅著しい

第3表 石器一覽表(2)

標頭 番号	写真調査番号	石種	地区	出土層名	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)	石材	備考
—	37-518	石輪	19F-20	第6層付埋藏	(5.5)	3.8	1.5	32.9	サヌカイト	折損
—	38-519	石輪	19F-20	第6層付埋藏	(6.4)	4.4	1.7	52.1	サヌカイト	折損 基部部に自然面残す
—	38-520	石輪	19F-21	第6層付埋藏	(4.2)	4.1	1.4	31.3	サヌカイト	折損 片面に自然面残す
—	38-521	楕形石鏃?	19F-11	第6層付埋藏	(4.8)	2.8	1.3	18.2	サヌカイト	折損
—	38-522	石輪	19F-12	表層	(6.2)	3.1	1.4	34.9	サヌカイト	両端部折損
—	38-523	石輪	19F-12	第6層付埋藏	3.1	3.5	0.9	14.4	サヌカイト	両端部折損
—	39-524	楕形石鏃?	19F-12	表層	(5.6)	(5.8)	1.3	41.3	サヌカイト	折損 片面に自然面残す
—	39-527	石輪	19F-21	第6層付埋藏	(4.3)	5.9	1.8	54.5	サヌカイト	折損 片面に自然面残す
—	39-528	石輪	19F-21	第6層付埋藏	(3.9)	3.0	1.0	14.0	サヌカイト	折損
—	39-530	楕形石鏃	19F-21	第6層付埋藏	3.8	2.3	0.7	6.7	サヌカイト	
35-481	42	石鏃	19F-11	下層部トレンチ 第6層付埋藏	4.4	5.6	2.8	70.9	サヌカイト	片面に自然面残す
36-486	40	二次加工のある測片	19F-11	第6層付埋藏	3.0	6.5	1.05	23.3	サヌカイト	
36-487	40	二次加工のある測片	19F-11	第6層付埋藏	2.6	7.5	1.05	16.0	サヌカイト	上端部に自然面残す
—	39-525	測片	19F-11	表層	4.4	5.4	0.9	23.0	サヌカイト	片面に自然面残す
—	39-526	二次加工のある測片	19F-11	第6層付埋藏	3.2	4.8	0.9	13.2	サヌカイト	片面に自然面残す
—	39-529	二次加工のある測片	19F-11	36層	2.8	2.4	0.4	3.2	サヌカイト	
—	39-531	二次加工のある測片	19F-11	第6層付埋藏	6.3	2.7	0.8	15.0	サヌカイト	
—	41-543	二次加工のある測片	19F-10+1	第6層付埋藏	7.8	10.6	1.8	139.2	サヌカイト	上端部に自然面残す
—	40-41-532	測片	19F-11	36層	1.5	1.5	0.2	0.7	サヌカイト	
—	40-41-533	測片	19F-11	表層	4.5	1.7	0.6	4.2	サヌカイト	
—	40-41-534	測片	19F-11	表層	5.7	2.1	1.2	8.4	サヌカイト	
—	40-41-535	測片	19F-11	下層部トレンチ 第6層付埋藏	6.3	1.9	1.0	9.9	サヌカイト	側縁部に自然面残す
—	40-41-536	測片	19F-21	第6層付埋藏	5.2	2.0	0.8	8.3	サヌカイト	
—	40-41-537	測片	19F-11	下層部トレンチ 第6層付埋藏	6.7	3.4	1.0	19.7	サヌカイト	
—	40-41-538	測片	19F-21	第6層付埋藏	4.7	4.6	0.8	15.7	サヌカイト	
—	40-41-539	測片	19F-21	第6層付埋藏	5.1	2.4	0.7	8.5	サヌカイト	
—	40-41-540	測片	19F-21	第6層付埋藏	11.5	2.4	0.7	8.3	サヌカイト	片面に自然面残す
—	40-41-541	測片	19F-21	第6層付埋藏	11.5	5.5	1.6	69.7	サヌカイト	片面に自然面残す
—	40-41-542	測片	19F-21	第6層付埋藏	4.0	7.5	0.8	26.9	サヌカイト	
—	40-41-543	測片	19F-21	第6層付埋藏	6.9	8.5	1.0	66.7	サヌカイト	上端部に全周面残す
—	40-41-544	測片	19F-21	第6層付埋藏	8.2	5.5	1.0	57.3	サヌカイト	片面に自然面残す
36-488	42	楕形	19F-1+20	第6層付埋藏	(6.7)	(5.8)	(5.6)	238.1	粗砂岩	欠損 二端縁部を受ける
36-489	42	石鏃?	19F-21	第6層付埋藏	(7.2)	(3.6)	0.9	33.7	粗砂岩	欠損 外縁部片欠
36-490	42	石鏃	19F-21	第6層付埋藏	(4.3)	(3.5)	0.9	22.5	粗砂岩	欠損 扁平片
37-401	42	石鏃	19F-21	第6層付埋藏	2.5	1.6	0.4	1.1	サヌカイト	ほぼ透明 四角盤形式
37-492	42	石鏃	19F-11	36層	(2.0)	2.0	0.3	1.2	サヌカイト	先端部欠損 凹盤盤形式



491



492



第37図 第6層出土石器(7)

部の径は6 cm程度と思われる。小片のため、詳細は不明である。

土錘

第29図の(434~441)は土錘である。(434)は円柱状のもので、長さ7.2 cm・幅は4.2 cm、孔の径は0.65 cmを測る。形状および大きさから弥生時代のものと思われる。(437)は縦長の算盤形で、長さ5.8 cm・幅1.4 cm、孔の径0.5 cmを測る。他は、紡錘形である。

鞆の羽口

第29図の(431~433)は鞆の羽口である。いずれも小破片で全容は不明である。(431・432)は基底部を残す。内径0.5 cm~1.2 cmをはかる。

銭貨

第29図の(442・443)は銭貨である。前者は径2.4 cm・厚さ1.5 mmを測る。文字は「寶」の字がかすかに残るが他は不明である。第3層からの出土で中世以降のものである。後者は径2.5 cm・厚さ2.5 mmを測り、皇朝十二銭の一つの「隆平永寶」である。第6層の下層の粘土面に張り付いて出土した。

埴輪

第30図は古墳時代の埴輪である。

(444~455)は円筒埴輪である。(444)は土師質の口縁部破片で、粘土紐を1帯張り付ける大形の「日置柱型」の埴輪である。(447)は須恵質の凸帯部の破片で、低いM字形の凸帯で外面にヨコハケを施す。(451~453)は土師質のヨコハケを施すもので、(446)はタテハケを施し、他はナデである。(455)は基底部を残すもので、断面楕円形である。外面にタテハケおよび基底部は面取り状ナデである。内面に指ナデを施す。(454)は土師質の形象埴輪で、動物の足の付根部分と思われ円筒状のものである。図版32の(499)は土師質の家形埴輪の屋根の底部分で、沈線を2条施す。

以上の遺物の他に、馬の歯が出土している(第1表参照)。また、桃の種子が6個出土している。

石器および石製品

石器および石製品は、サヌカイトの剥片などを含めてコンテナにして3箱出土している。大部分が第6層からの出土であるが、他の遺構から出土したものもあり、ここでまとめて報告する。

第31図の(456・457)、図版35の(511)は砥石である。(456)は、ほぼ完形で長辺の4面を使用し凹面をもつ。(457)は一端のみ残存し、長辺の4面を使用している。(511)は両端を欠損している。以上の3点は、古代のものと思われる。

第31図の(459~463)・第32図の(465)は弥生時代中期の石鐮で、計6点出土する。(460・463)が凹基無茎式のもので、他は平基無茎式のものである。

第31図の(464)は弥生時代中期の石錘で、先端部を欠損する。1点のみ出土する。

第31図の(458)、第32図の(468~470)、第33図の(471・473・476)、第34図の(480)、第35図の(482・483・485)、図版37の(516~518)、図版38の(519・520・522・523)、図版39の(524・527・528)は弥生時代中期の石槍である。完形に近いものは(458)のみで、ほとんどのものが折損し先端部ないし基部を残すものが多い。本遺跡では21点と最も多く出土している。

第32図の(466・467)、第33図の(472・474・475)、図版35の(512・513)は小刀で、計7点出土している。石槍同様に折損しているものが多く、(466)がほぼ完形である。

第33図の(477)、第34図の(478)および図版37の(515)は尖頭器である。(477)は片面に自然面を残しており、平基有茎式の未成品とも思われる。(478)は二等辺三角形形状をしており、基底部の端部に自然面を残すことから、平基無茎式の大形の石鏃とも考えられる。右側縁に自然面を残すことから、これも未成品の可能性を残す。

第34図の(479)、図版37の(514)、図版38の(521)、図版39の(530)は楔形石器である。いずれも磨滅が著しい。(514)は基底部の端部に自然面を残す。

第35図の(484)は刃器で、周縁に刃を作り出すものである。

第36図の(486・487)、図版39の(525・526・529・531)および図版41の(545)は二次加工のある剥片である。

図版40・41の(532~544)は剥片である。大小様々な形状の剥片が見受けられ、比較的大きなものが多量に出土している。中には刃を作り出しているように見えるものもあるが、よく観察すると、砂礫などによる後からの剥離であることが判る。

第35図の(481)は石核である。片面に自然面を残す。

以上のものがサヌカイト製の打製石器である。

磨製石器は、2点出土している。

第36図の(489)は片刃の石砲丁で、約1/2を残存する。

第36図の(490)は扁平片刃石斧で、右側肩部を欠損する。

その他の石器としては、鋳型がある。

第36図の(488)は砂岩製の鋳型で、二次焼成を受けている。小片のため全容は不明である。

いずれも、弥生時代中期のものである。

縄文時代の石器は、第37図の(491・492)に示す石鏃が2点出土している。いずれも、凹基式のサヌカイト製のものである。

6. 第5面

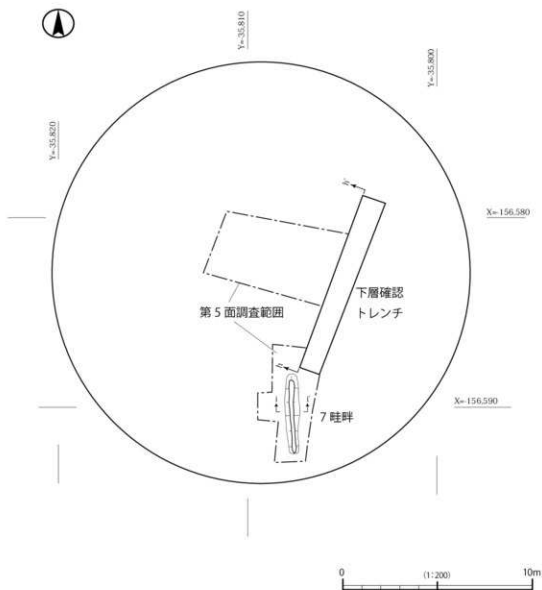
第5面は、第7-2層上面で検出した遺構面で、T.P.+10.3~10.4mを測る。この面は、下層確認のトレンチを開けた際に、粘土層が検出されたことから(第7図、図版5-3)、一部を拡張したもので、全容は不明である。畦畔を1条検出した(第38・39図、図版5-4・5)。

7畦畔は、南北方向に伸び、幅0.5~0.8m・高さ0.1m・検出長3.8mを測る。北端部分では削平を受け消失している。中央部で、この畦畔に直交する形で一部分を下げ粘土面を拡張したが、湧水が激しく、畦畔の検出に到らなかった。

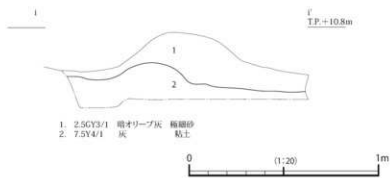
下層確認トレンチの断面では、この面からの踏み込みが無数に観察されたことから、この面が水田面であることが類推される。

遺物は、この面から出土していないため、時期の確定が困難であるが、上面遺構の畦畔と同一方向および同一規模であることから、古代に属すると考えられる。

下層の第7-3層からも、遺構・遺物ともに検出されなかったことから、本調査地は、古代の水田面であるこの面が最終遺構面であることが確認された。



第38図 第5面 全体平面図



第39図 第5面 7 畦畔 断面図

第5章 総括

今回の調査では、1.8 mの厚みをもつ盛土および現代耕作土層を機械掘削で行い、以下順次、地表下3.6 mまで人力掘削で発掘調査を行った。さらに、調査最下層にあたる砂礫層がまだ下方に続いていたことから、下層を確認するためのトレンチを入れることとなった。

その結果、遺構面が5面検出され、72コンテナにおよぶ遺物の出土を見た。

なお、第2面は中世以降、第3面は古代から中世前期、第4面・第5面は古代に属す。

遺構では、中世以降の鋤溝群、中世および古代の流路、古代の水田面などを検出し得た。このことから、古来より当地が洪水に幾度も襲われながらも、生産地として活用されてきた様子を窺い知ることとなった。また、耕作地として安定を見るのは、大和川の付け替え以降であることが窺われた。

古代の洪水堆積層である第6層は、現大和川対岸の船橋遺跡において平成8年度(1996)および平成13年度(2001)に行われた調査によって検出された、古代末から中世前期の幅130 m以上の流路の延長線上に位置することから、同一の流路の可能性が考えられる(第40図)。

遺物については、第6層から大半のものが出土しており、その内容も多岐におよぶ。残念ながら、遺物は第6層内の下部に向かって古くなるということではなく、土器に関しては最下部からもわずかではあるが黒色土器や白磁が出土したことから、この堆積層の時期は11世紀以降と考えられる。

しかしながら、流路から出土した古代の遺物には、8世紀から10世紀にかけてのものが多数を占めている。小破片が多く、摩耗しているものもあることなどから、流路上流側にそれらの時期の遺跡が存在した可能性が高いと思われる。

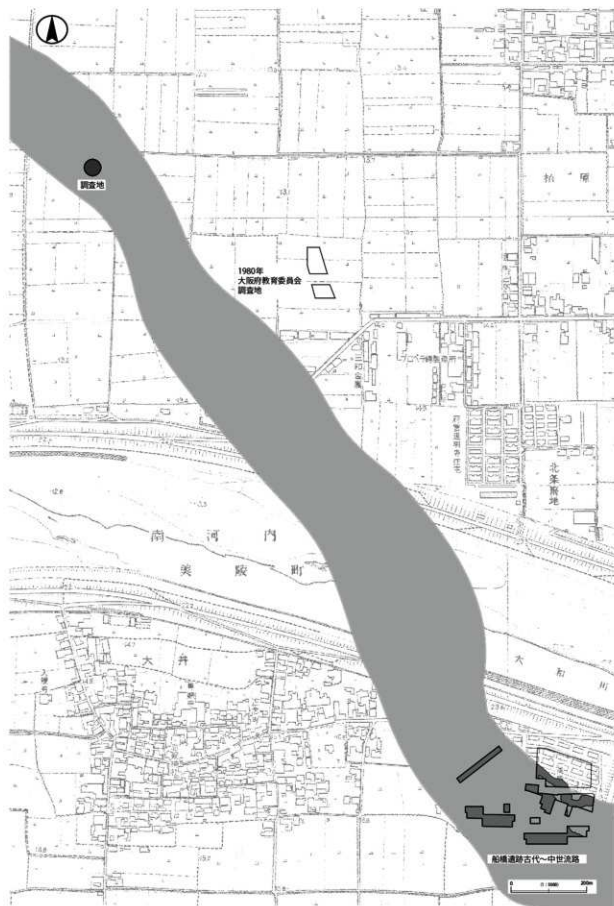
また、この流路からは、若干ではあるが瓦も出土しており、その中に獣面文の軒丸瓦があったことから、以前、この種の瓦が出土した近在する船橋廃寺のものであった可能性も想定できよう。

古墳時代の円筒埴輪や形象埴輪、須恵器や土師器なども出土している。これらも、小片であることと磨滅が著しいことから、上流にこの時期の遺跡が存在していたと思われる。

さらに、縄文時代や弥生時代の土器も出土している。これらの遺物も、前述した土器と同様に小破片で摩耗したものがほとんどであり、数量的にも少ないものである。

特筆すべき遺物としては、本調査区においては、古代の洪水堆積層に混じって、弥生時代の石器がコンテナにして3箱出土していることである。これらの石器が砂礫層下部に集中して出土したこと、土器とは反してほとんどの石器が磨滅していないことや、剥片の破断面が鋭利であること、打製石器がほとんどであり、中でも石槍が過半数を占めることなどから、それらの石器製作跡がこの調査区の東側近辺にあった可能性が考えられる。

以上のことから、川北遺跡の中心は、大阪府教育委員会の調査と合わせてみると、東側に遺構面が高くなり、弥生時代中期や古墳時代前期の遺構や遺物が検出されたことから、流路北岸に拡がっている可能性が大きく、今後、周辺の調査が待たれるところである。



第40図 古代河川流路想定図

写 真 图 版

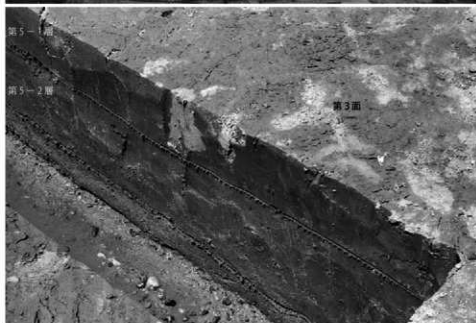
1. 中央南北断面
(西から)



2. 第2面 1・2流路
検出状況(南から)



3. 中央東西断面
(南から)



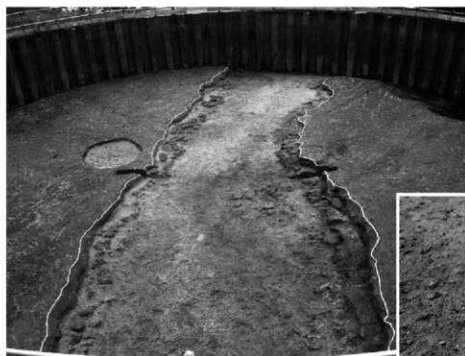
図版2 遺構(2)



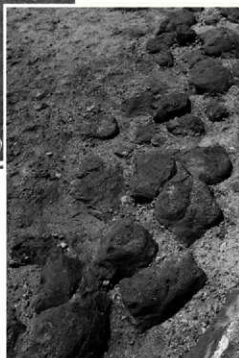
1. 第3面 全景 (南から)



2. 第3面 4・5 畦畔 検出状況 (北から)



1. 第3面 3流路 検出状況 (北から)



2. 第3面 3流路肩部 粘土ブロック 検出状況 (南から)



3. 第3面 3流路 西側肩部断面 (南から)

図版4 遺構(4)



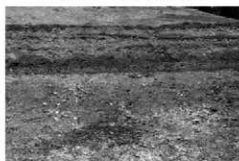
1. 第4面 全景 (南から)



2. 第4面 6畦畔 検出状況 (南から)



1. 第6層 上層東西断面(1)



2. 第6層 上層東西断面(2)



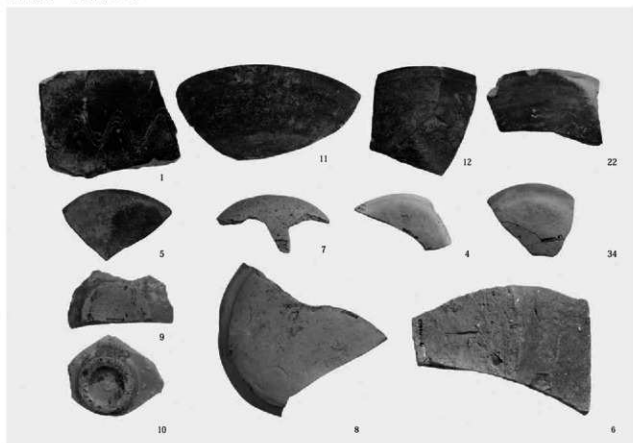
3. 下層確認トレンチ断面(東から)



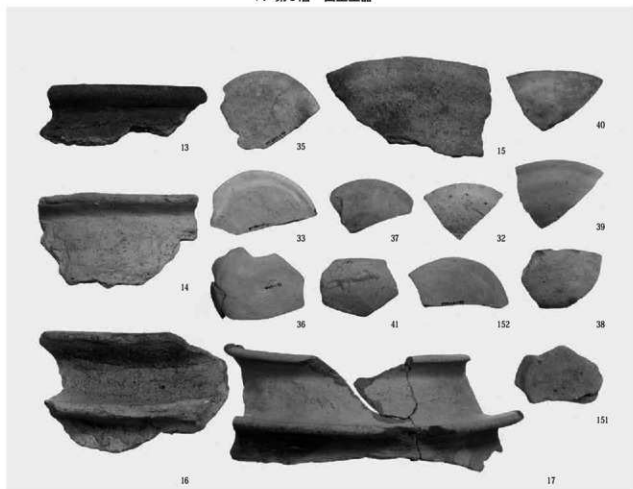
4. 第5面 7畦畔
検出状況(東から)



5. 第5面 7畦畔
断面(南から)



1. 第3層 出土土器



2. 第3面 3流路 出土土器(1)



28

1. 第3面 3流路 出土土器(2)



73

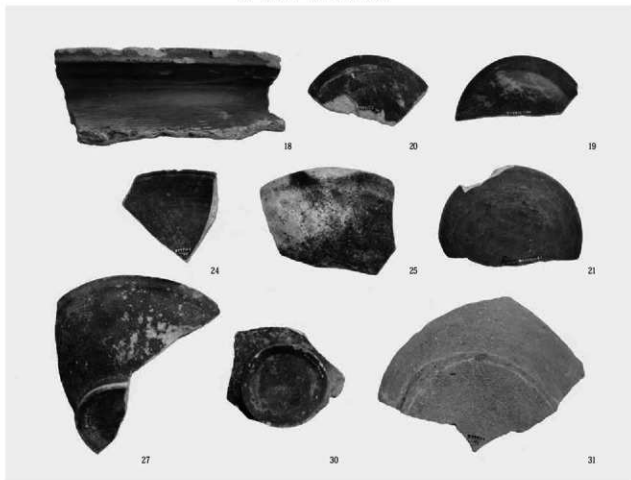


60



69

2. 第6層 出土土器(1)



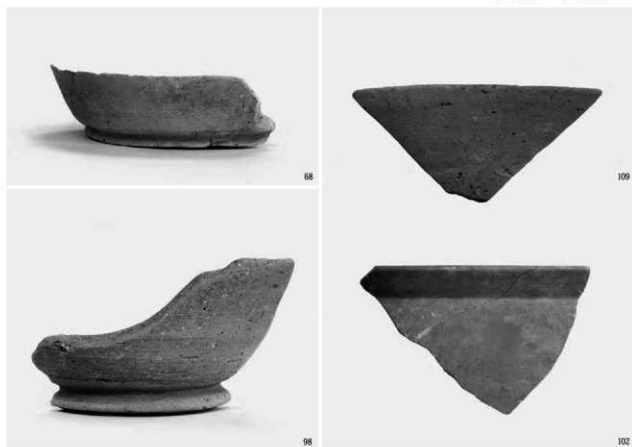
3. 第6層 出土土器(2)



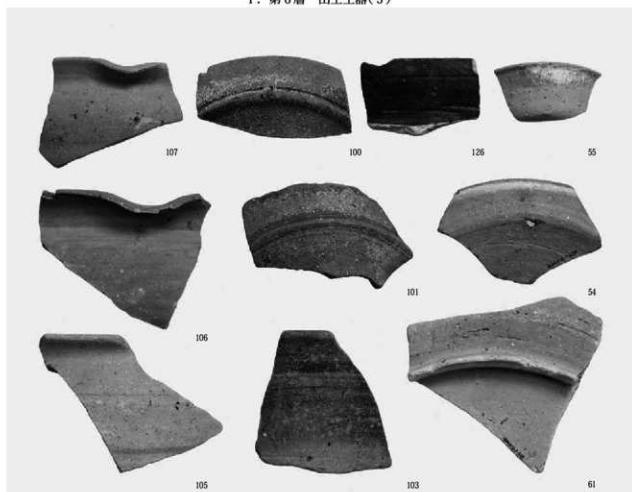
1. 第6層 出土土器(3)



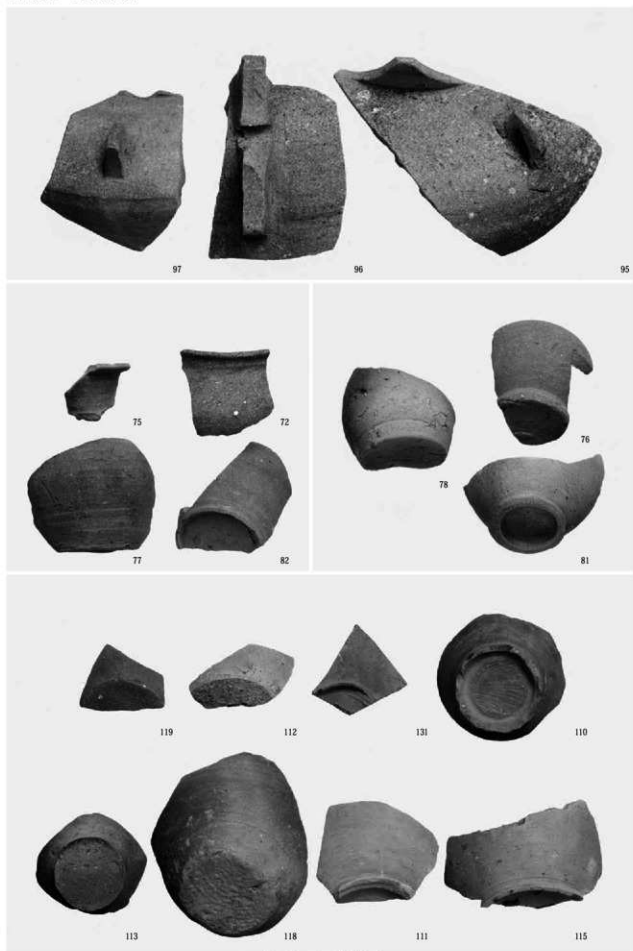
2. 第6層 出土土器(4)



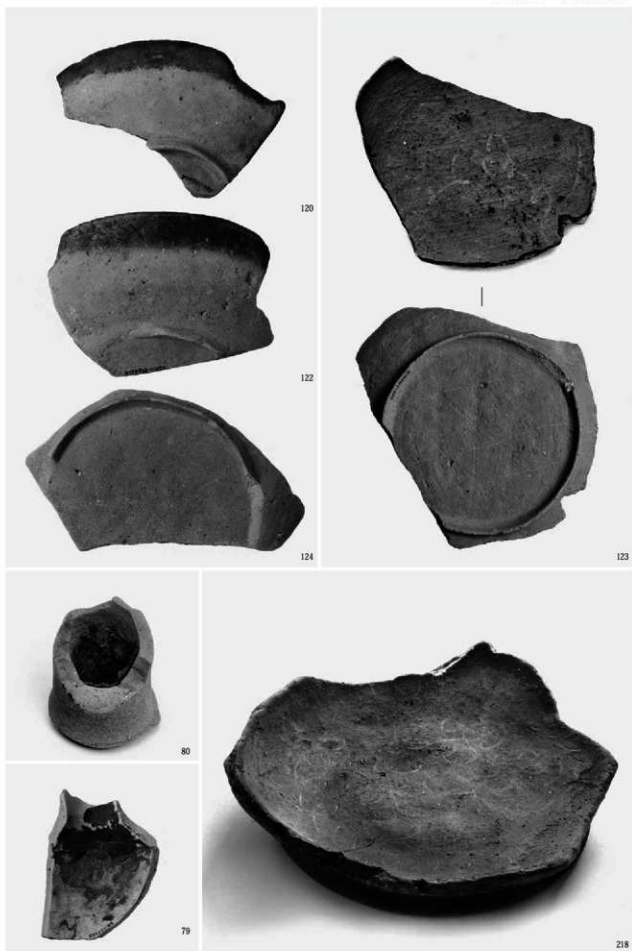
1. 第6層 出土土器(5)



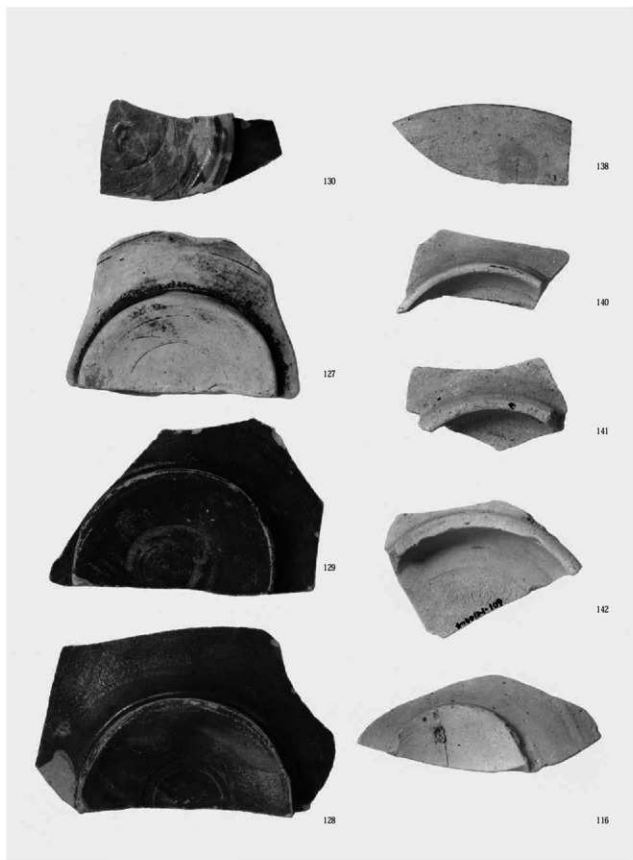
2. 第6層 出土土器(6)



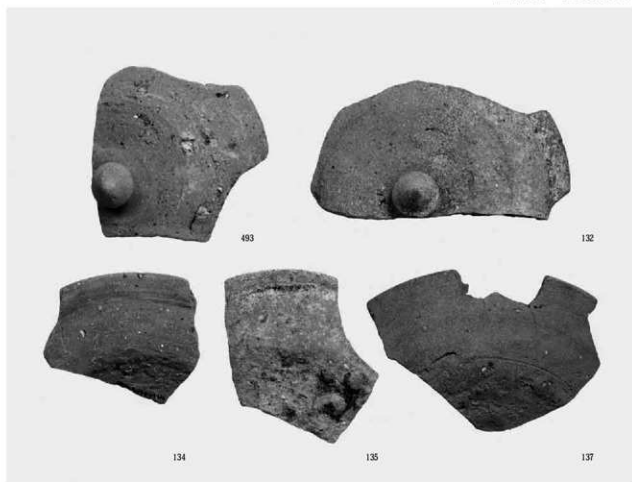
1. 第6層 出土土器(7)



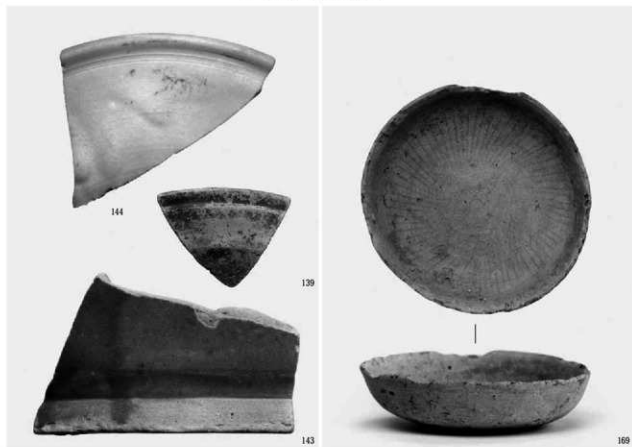
1. 第6層 出土土器(8)



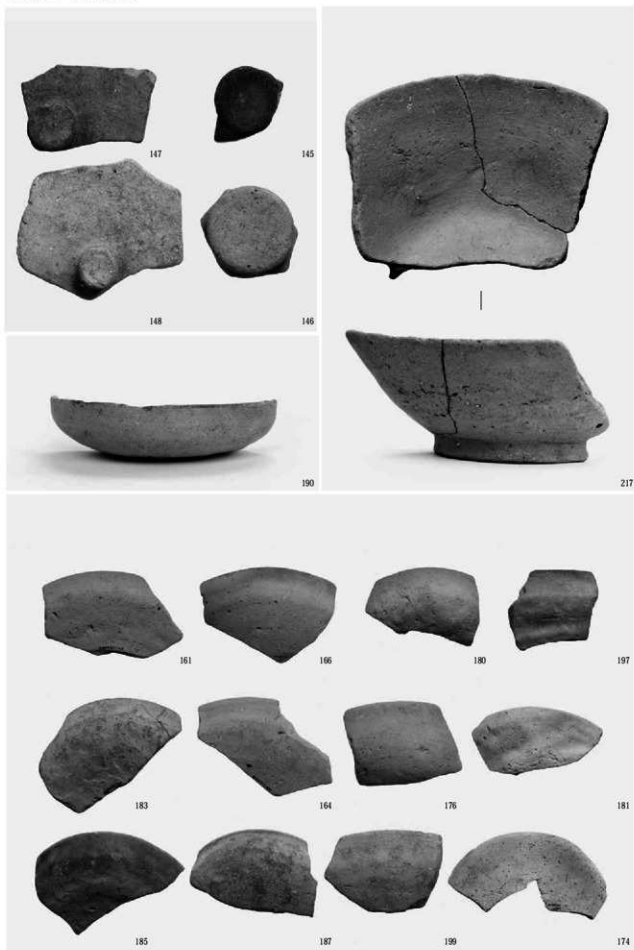
1. 第6層 出土土器(9)



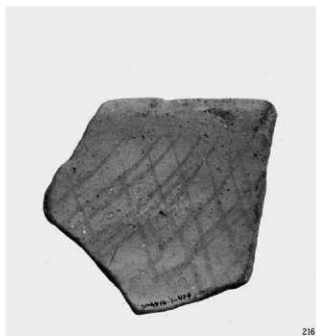
1. 第6層 出土土器(10)



2. 第6層 出土土器(11)



1. 第6層 出土土器(12)



216



159



165



239



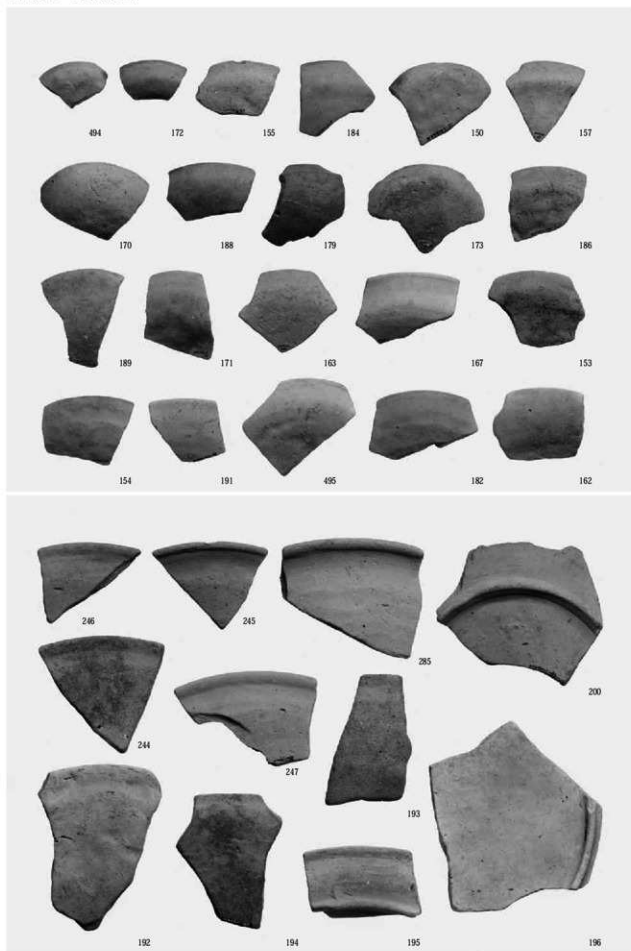
175



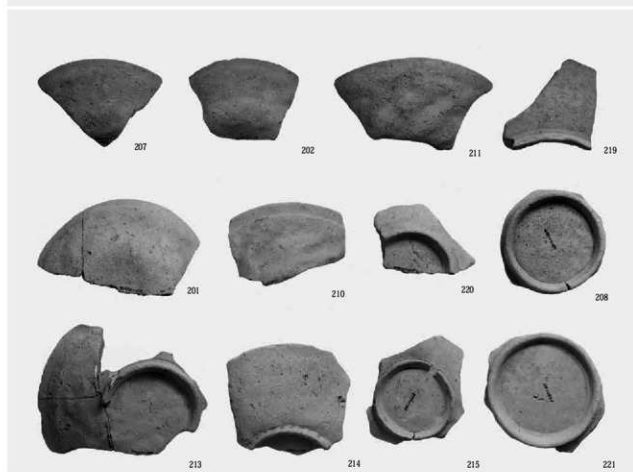
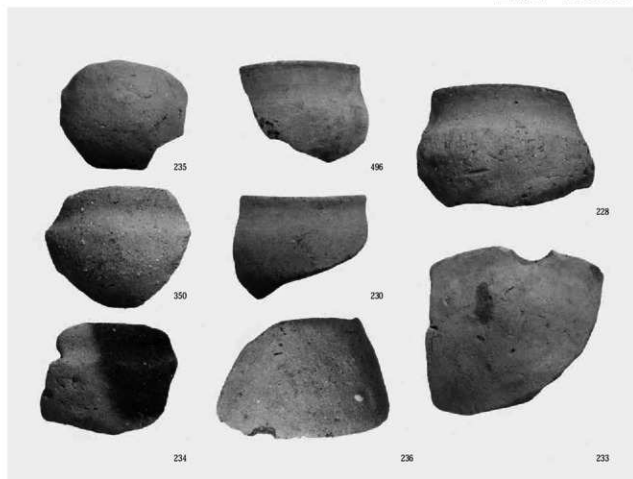
242



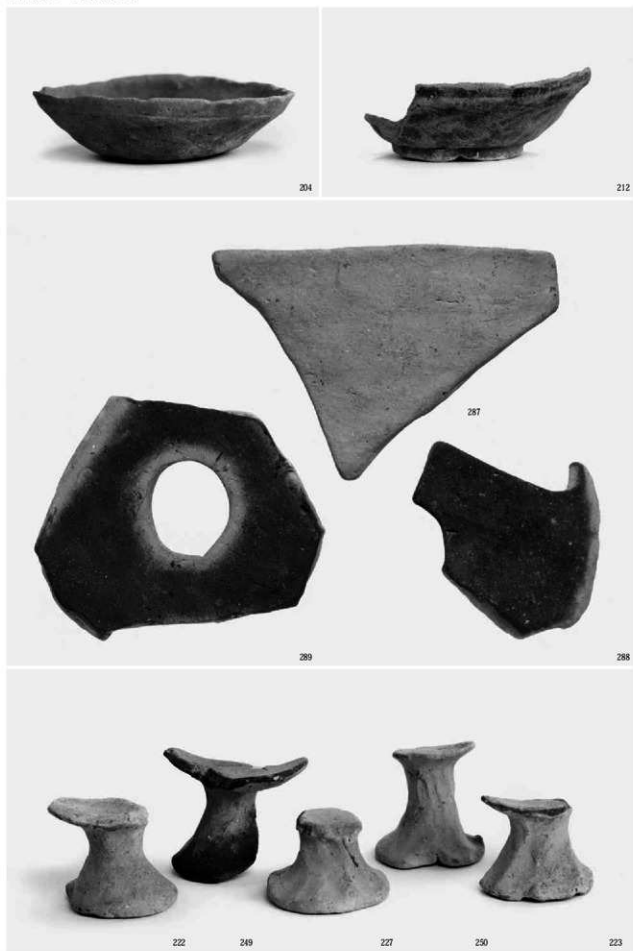
241



1. 第6層 出土土器(14)



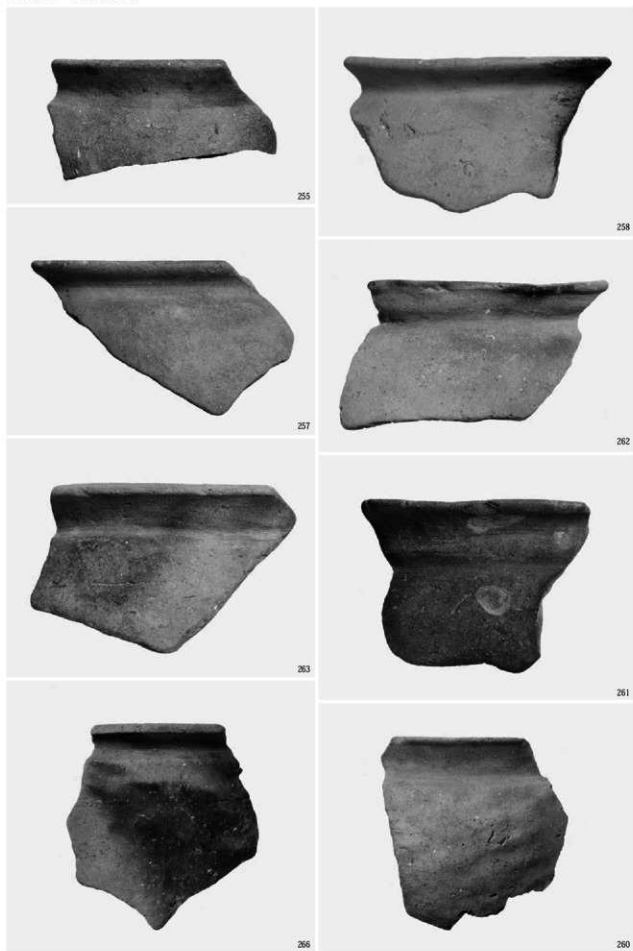
1. 第6層 出土土器(15)



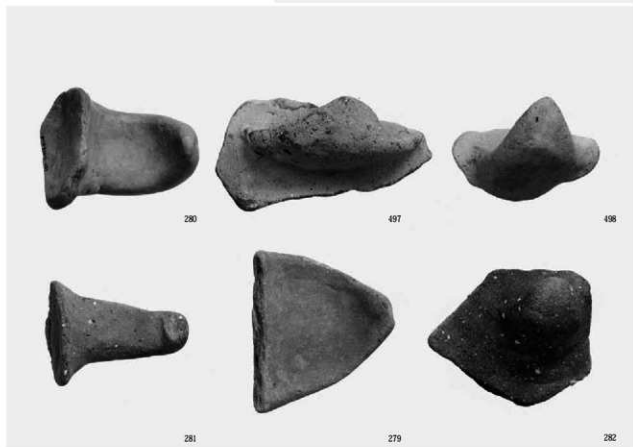
1. 第6層 出土土器(16)



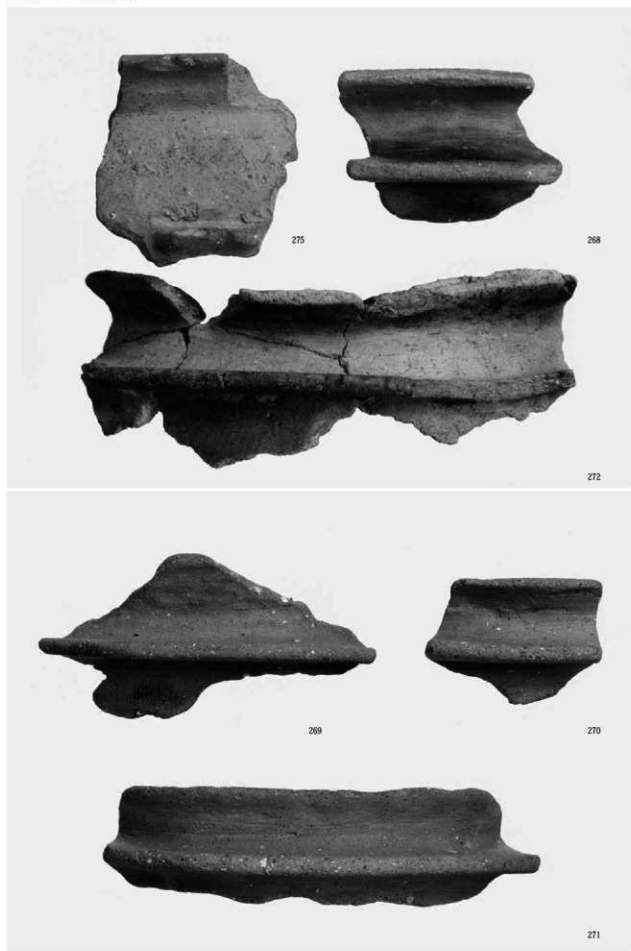
1. 第6層 出土土器(17)



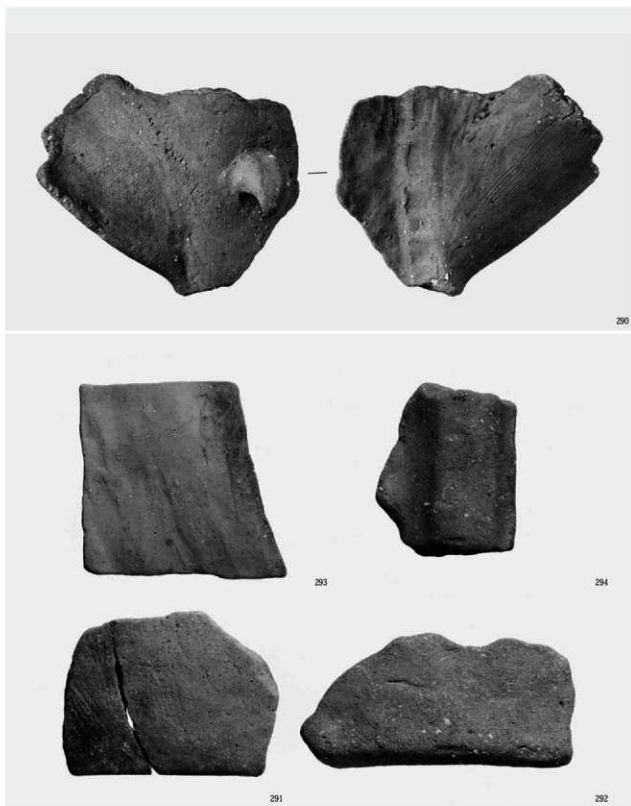
1. 第6層 出土土器(18)



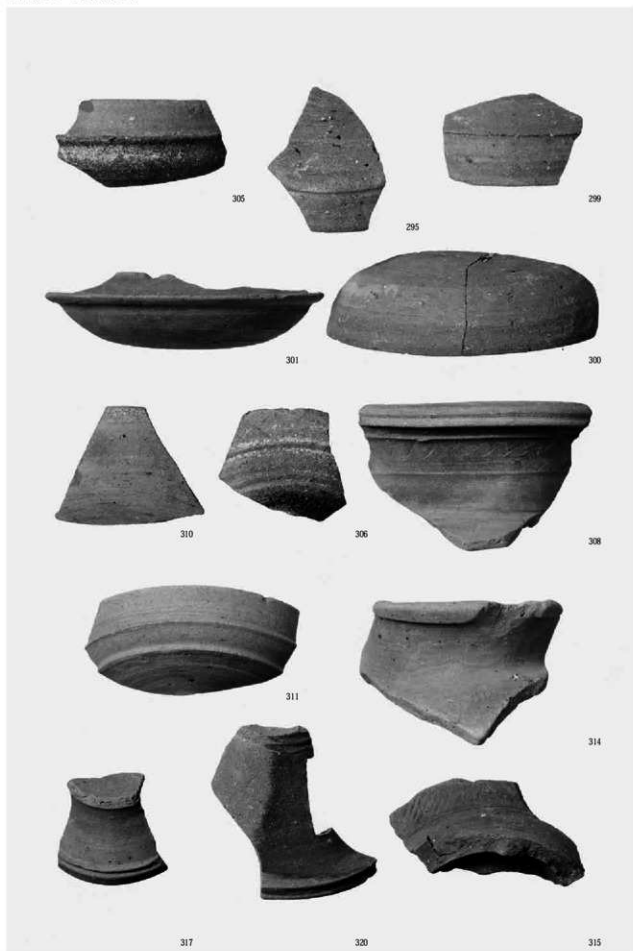
1. 第6層 出土土器(19)



1. 第6層 出土土器(20)



1. 第6層 出土土器(21)



1. 第6層 出土土器(22)



307



323



312



313



333



224



325

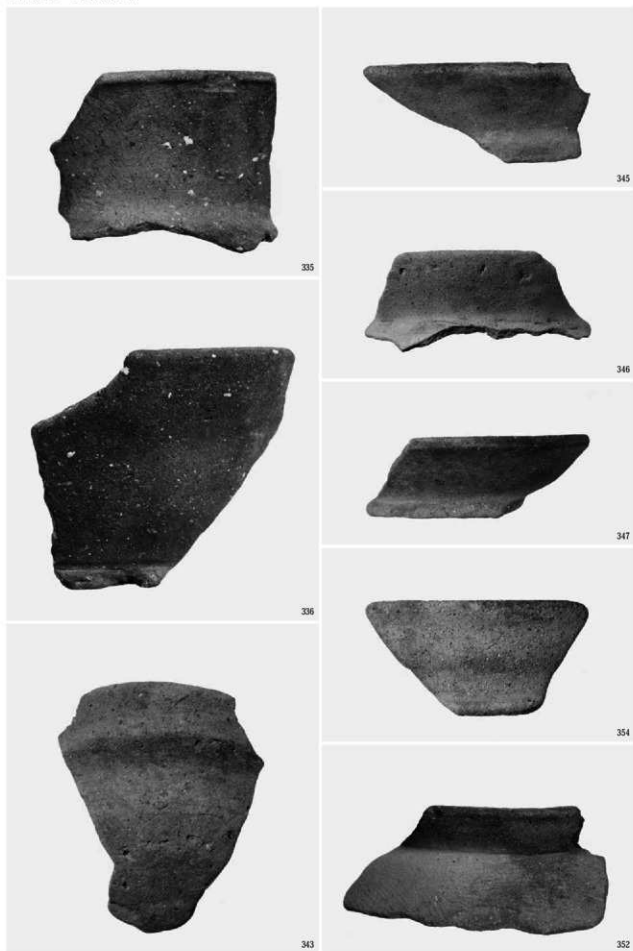


326

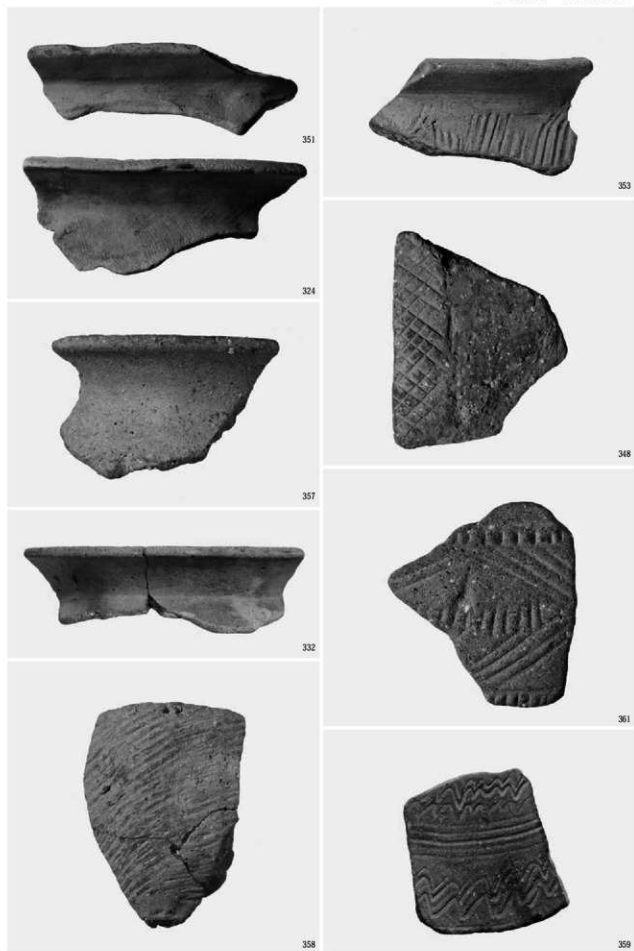


327

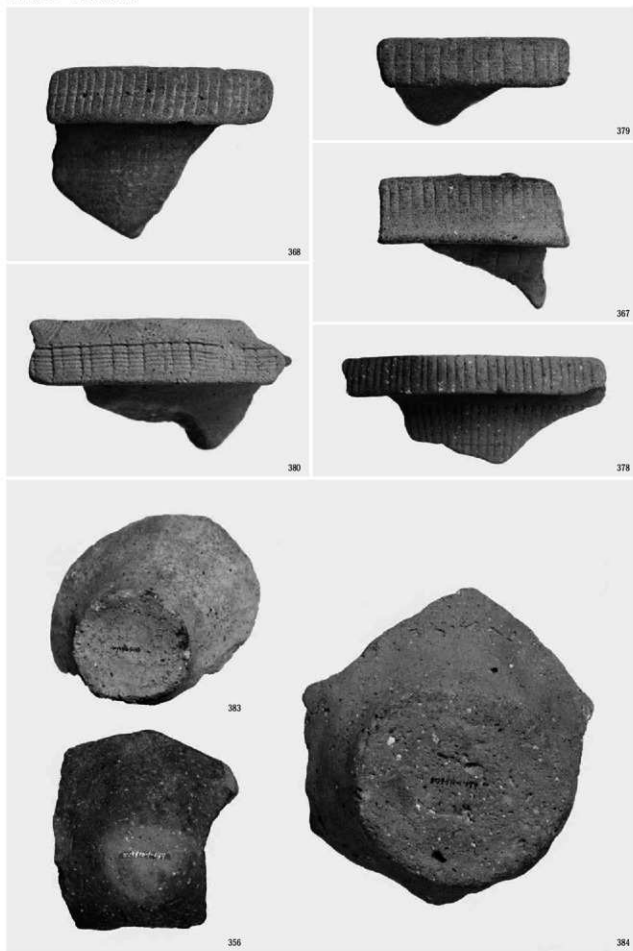
1. 第6層 出土土器(23)



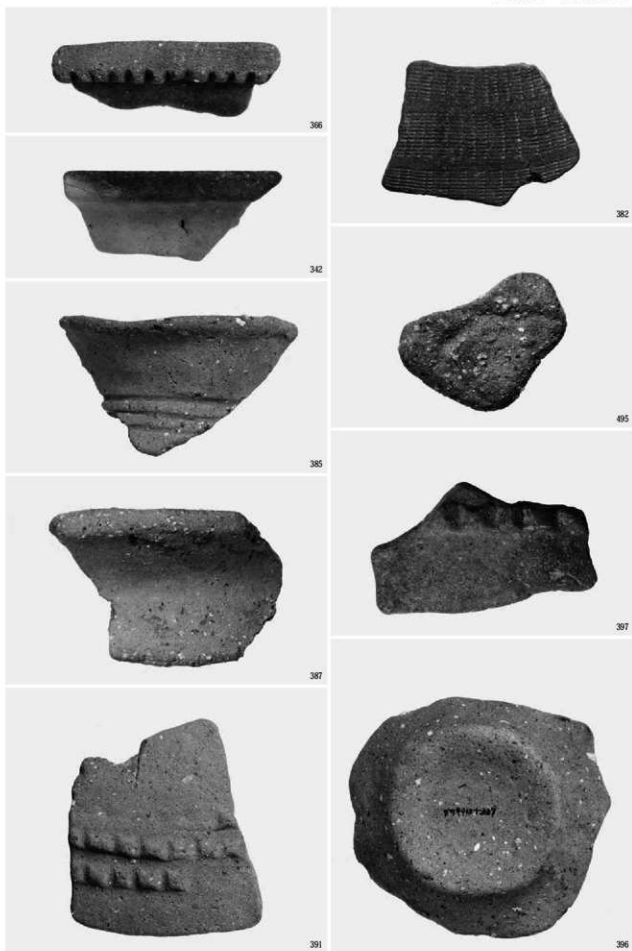
1. 第6層 出土土器(24)



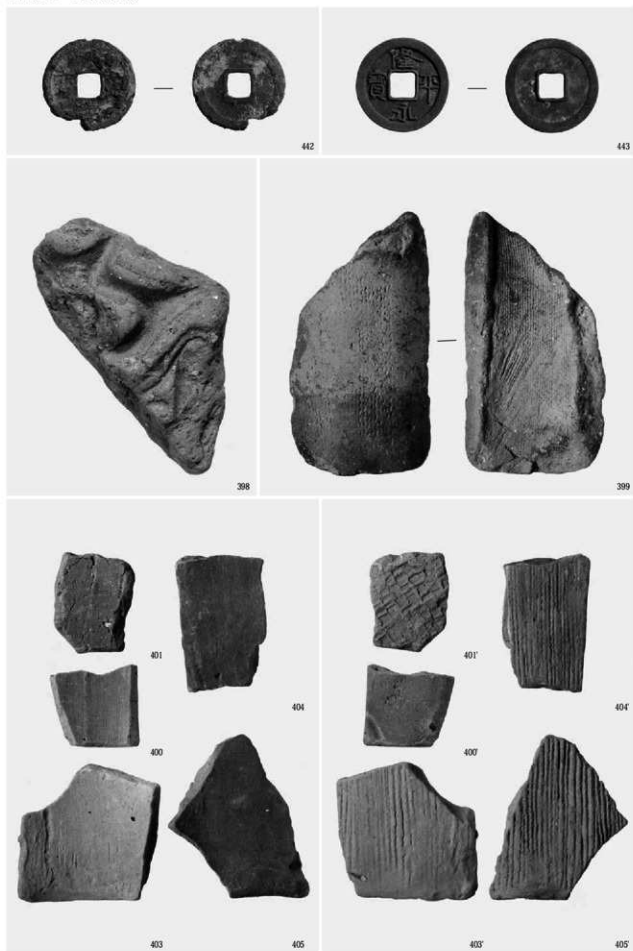
1. 第6層 出土土器(25)



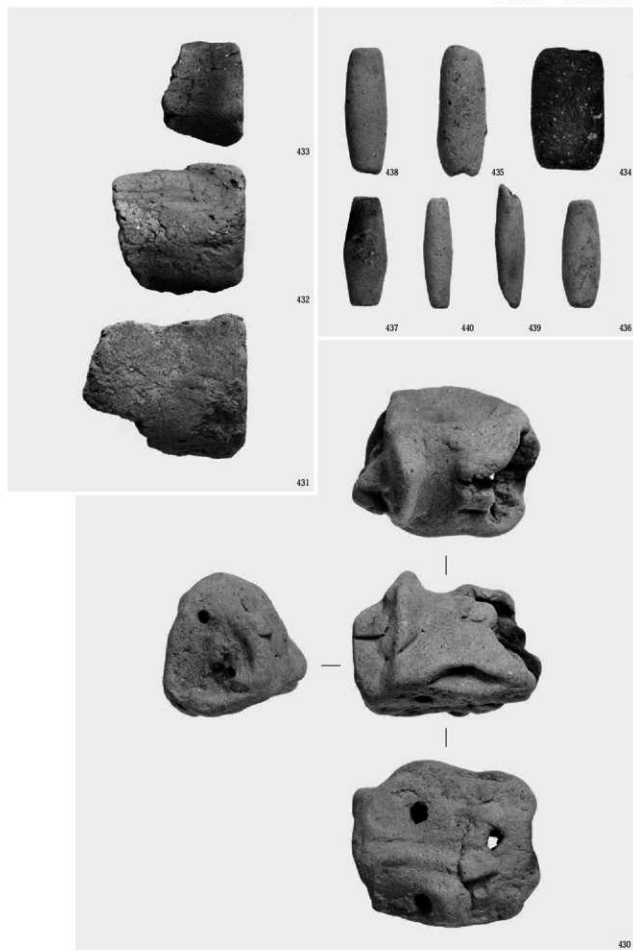
1. 第6層 出土土器(26)



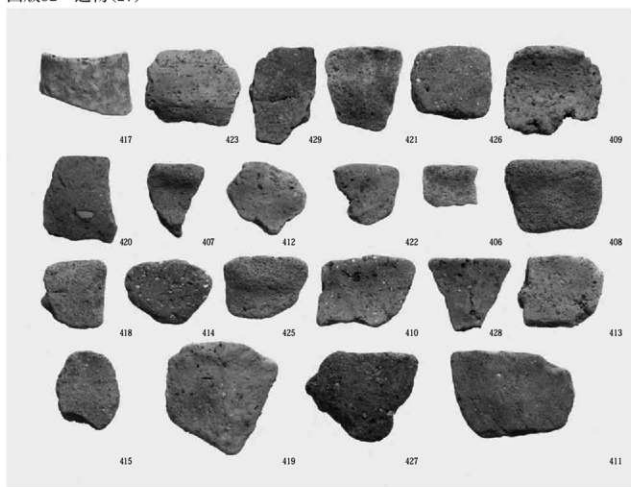
1. 第6層 出土土器(27)



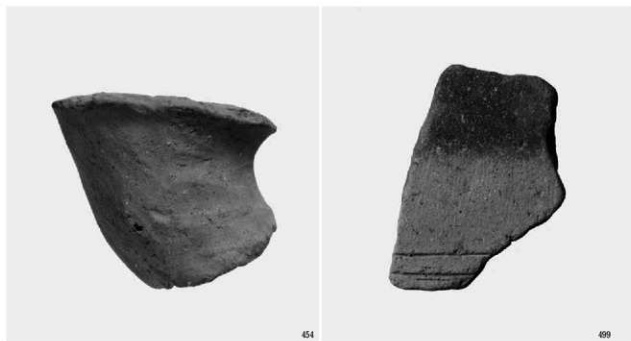
1. 第6層 出土錢貨・瓦



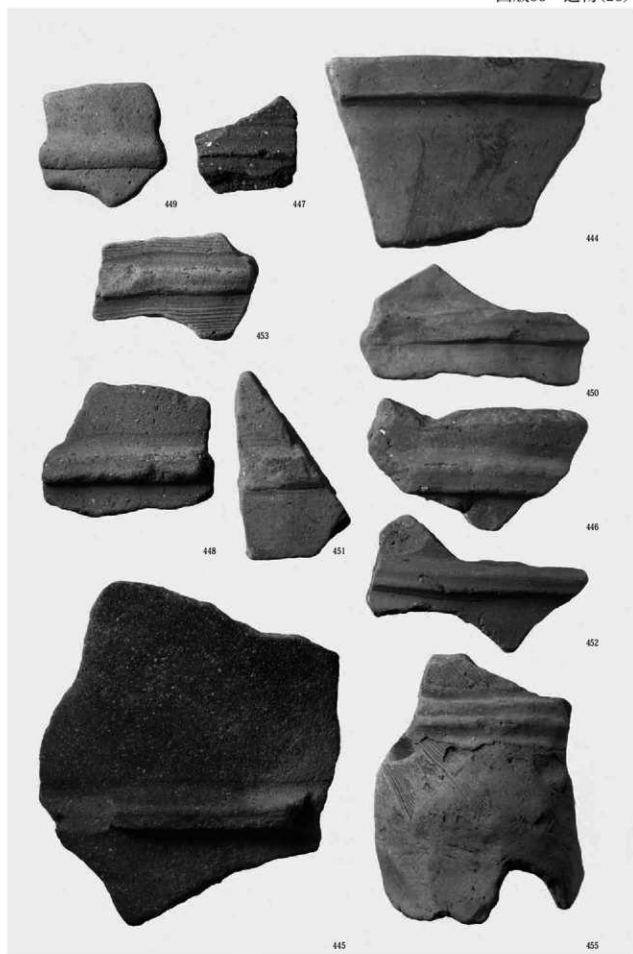
1. 第6層 出土土製品



1. 第6層 出土製塩土器



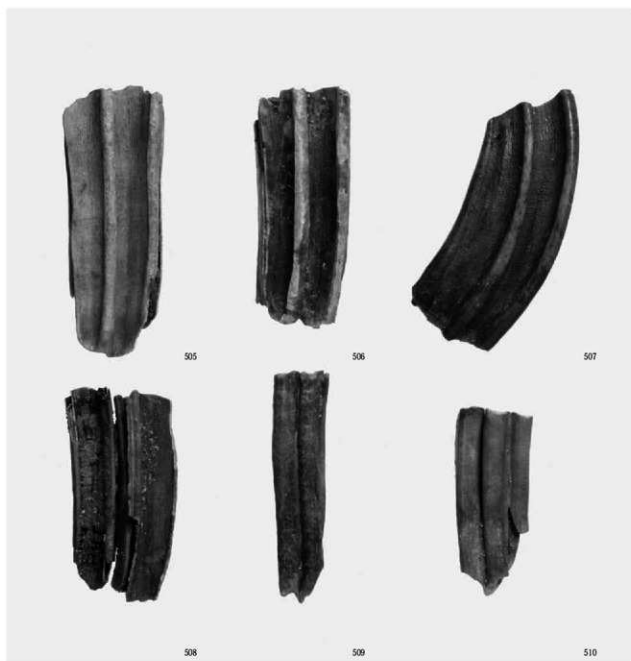
2. 第6層 出土形象埴輪



1. 第6層 出土円筒埴輪



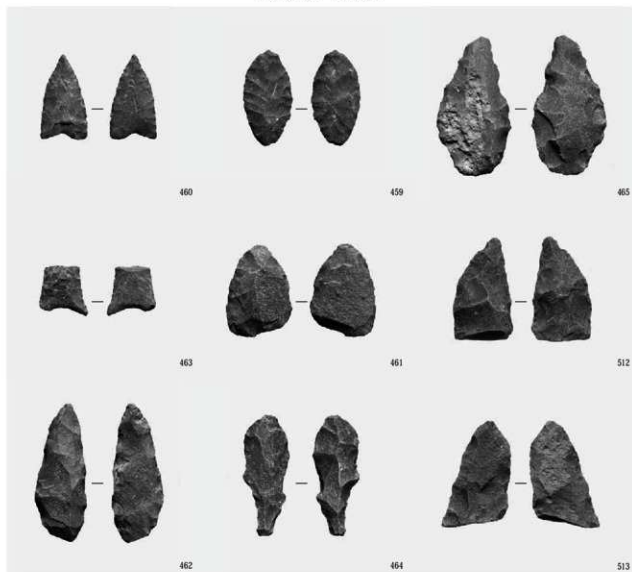
1. 第6層 出土桃の種子



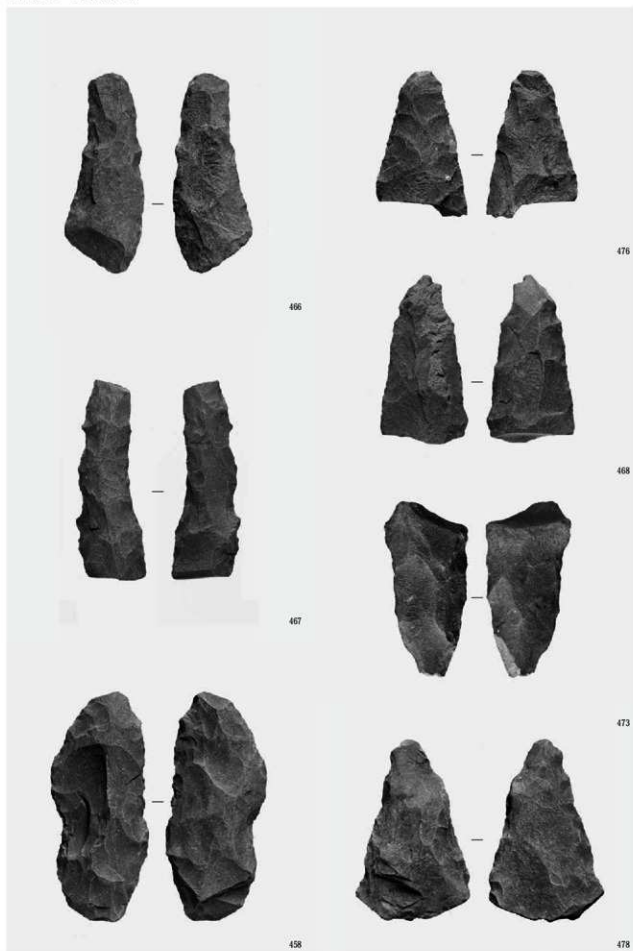
2. 第6層 出土馬歯



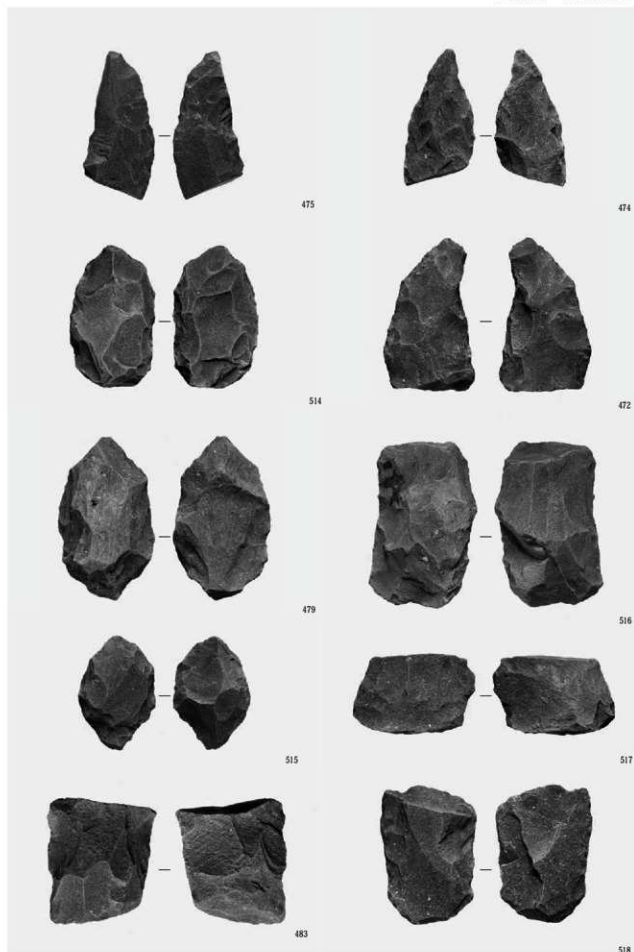
1. 第6層 出土砥石



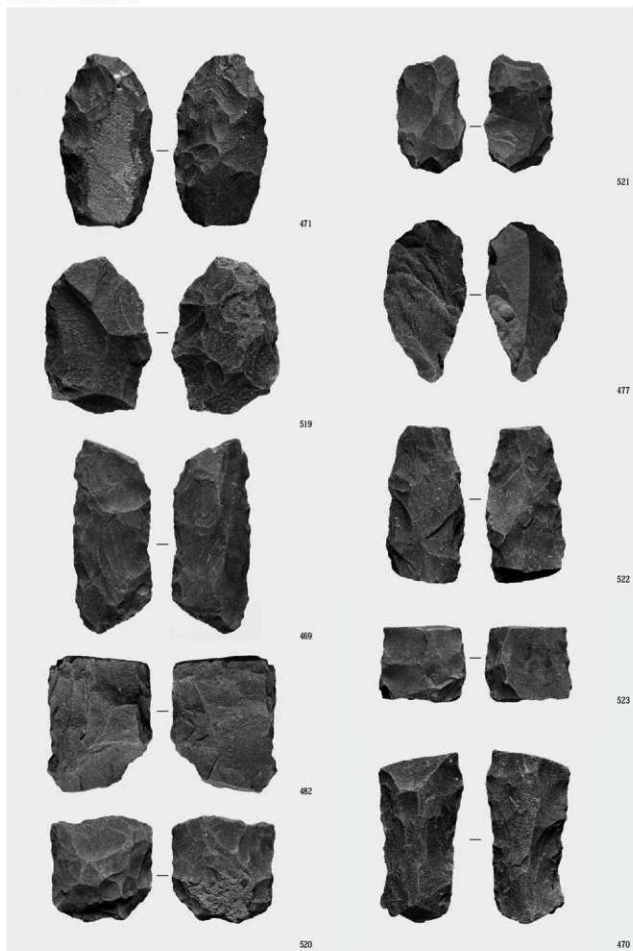
2. 第6層 出土石器(1)



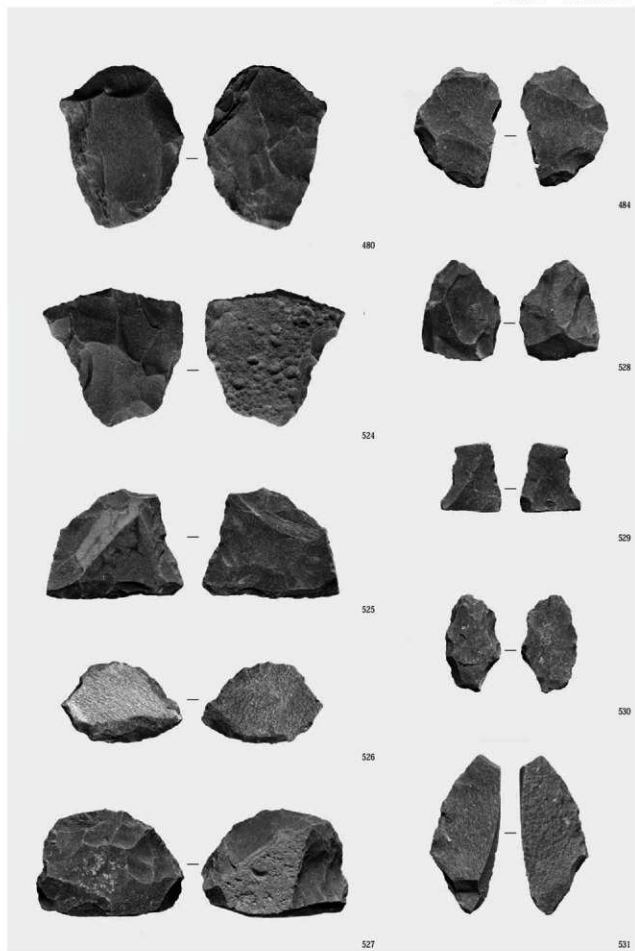
1. 第6層 出土石器(2)



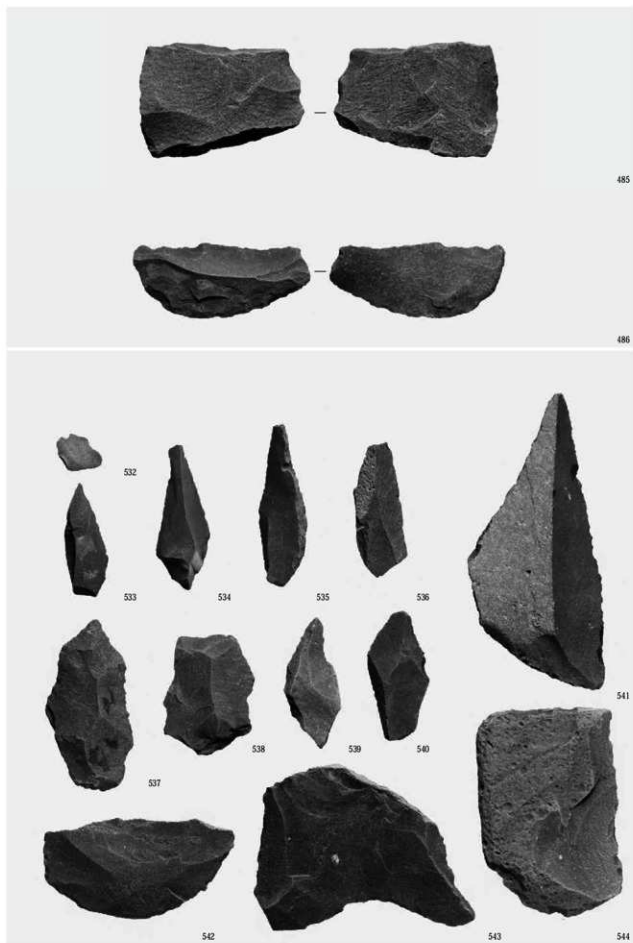
1. 第6層 出土石器(3)



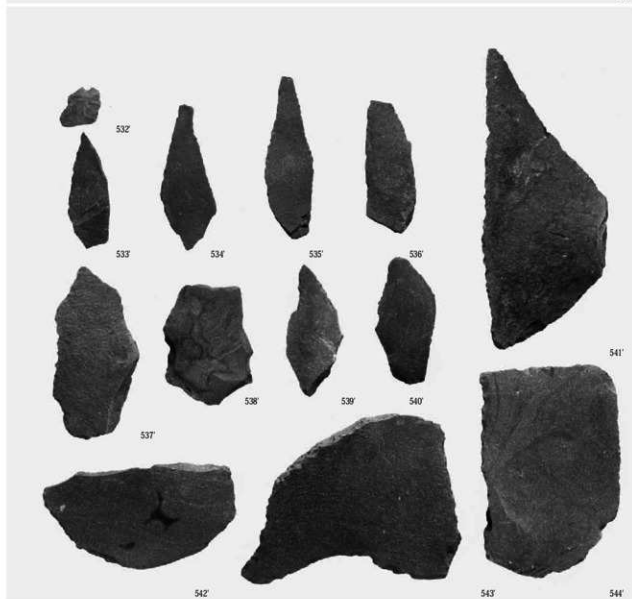
1. 第6層 出土石器(4)



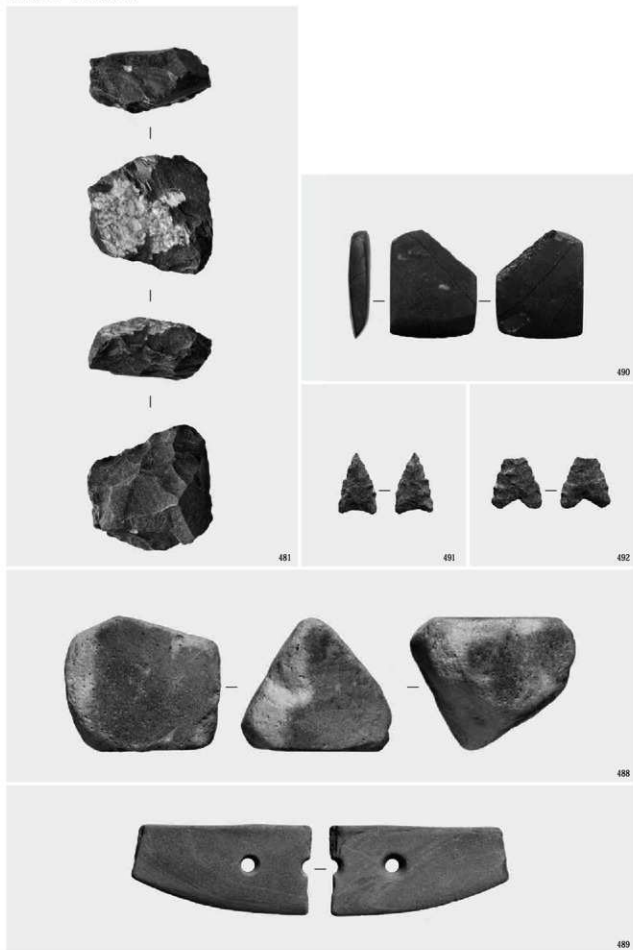
1. 第6層 出土石器(5)



1. 第6層 出土石器(6)



1. 第6層 出土石器(7)



1. 第6層 出土石器(8)

報告書抄録

ふりがな	かわきたいせき						
書名	川北遺跡						
副書名	バイパス送水管(藤井寺～長吉)整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	(公財) 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第243集						
編著者名	森屋美佐子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel. 072-299-8791						
発行年月日	2013年12月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経度・緯度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
かわきたいせき 川北遺跡	ふじいでらし 藤井寺市 かわきたいちようめ 川北1丁目 ちない 地内	27226	80	北緯 34°35'04" 東経 135°36' 45"	2013.0408 ～ 2013.0628	380㎡	バイパス送水管 (藤井寺～長吉)整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
川北遺跡	生産	古代	畦畔(水田)	黒色土器・須恵器・土師器		古代水田を3面検出	
		古代 ～ 中世	流路	瓦器・須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰軸陶器・白磁・瓦・製塩土器・土製品・馬歯・銭貨・石製品・埴輪・古墳時代土器・弥生土器・縄文土器・打製石器・磨製石器・サヌカイト剥片		旧大和川の本流に該当する	
要約	<p>川北遺跡では、今回の発掘調査で、古代から中世にかけての遺構面を検出した。中でも、古代の水田面を3面検出したことから、その間に数度にわたる流水堆積に見舞われながらも、稲作を行っていた様子が窺われた。</p> <p>また、古代の流水堆積層の中からはコンテナ50箱以上の遺物が出土した。それらは、縄文時代から古代までの様々な時期のものが、そう遠くない場所から流れ着いたものと思われる。</p> <p>その中でも、小片ではあるが獣面文瓦が出土したことは、特筆できるものである。さらに、60点以上におよぶ石器とともにサヌカイト剥片などがコンテナ3箱出土し、ほとんど摩耗していないことから、近くに石器製作跡があった可能性を指摘できよう。</p>						

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第243集

川 北 遺 跡

バイパス送水管事業（藤井寺～長古）整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2013年12月27日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 近畿印刷センター
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号